創立20周年記念誌

わかば

熊本市立若葉小学校

若葉小学校校歌

野田初枝作詩
秋山正次校閲
格沢信一作曲

一、大阿蘇の朝日さす原
まなびやはかゞやくみどり
すゞかけの若木のように
手をつなぎのびるよみんな
あく明るい若葉小学校

二、栄えゆく町のいのちよ
はげみあう われらの学び
大鳥のはゞたくように
胸をはり希望にもえる
あくたくましい若葉小学校

昭和四十五年の夏はじめ
里内かく圖

師弟同行
熊本市立道兼小学校

目　次

祝　辞

創立二十周年に寄せて	学校長	郡　保雄	1
創立二十周年に想う	ＰＴＡ会長	国武史重	2
創立二十周年に寄せて	熊本市長	星子敏雄	2
記念誌の刊行を祝う	熊本市教育長	成松和夫	3
創立二十周年を祝す	校区自治会連合会会長	池田国雄	4
師第同行を基本目標に	校区福祉協議会会長	高松　実	4

回　顧

祝　二　十　周　年	初代校長	福田　覚	6
創立二十周年にあたって	二代校長	古里里一	7
創立二十周年を祝す	三代校長	坂本鶴夫	8
わかばの思い出	四代校長	片山生志	9
思い出は泉の如く	五代校長	水上千歳	9
若葉小の思い出	六代校長	前川信行	１０

校区のあゆみ

１２

学校のあゆみ

１５

若葉小学校の基礎づくり	旧職員	坂梨正行	１９
若葉小学校の思い出	旧職員	美作　明	２０
緑化運動について	現職員	永松允積	２１
一日の生活の様子から	現職員	江崎文洋	２３

先生のページ

創立の頃をおもう	旧職員	大坂了也	２５
若葉校周辺の今昔	旧職員	南蘇　一	２５
私と若葉小	現職員	下村静枝	２６
ふるさと若葉	現職員	本田恵子	２７
若葉小二十周年を迎えて	現職員	谷田敬一郎	２７
二十周年に寄せて	現職員	嶋本暢子	２８

児童の作品

２８

思い出便り――卒業生から――

思い出を運動場に残して	二回卒	梅田祐二	４９
キラキラと輝いた新鮮な日々	六回卒	橋口明美	４９
思　い　出	六回卒	宮永　貢	５０
思い出多い若葉のなかで	七回卒	島田成子	５０
ポプラそして樹木園	八回卒	戸田節子	５１
先生のげんこつ	十回卒	岩見康夫	５１
黒柳さんにまけない私の学校	十七回卒	山下順子	５２

会員のページ

あ　あ、雑　感		興梠かずこ	５２
若葉小学校創立二十周年に思う		時吉幸男	５３
父　親　の　変　化		二子石三喜男	５３
人　の　子、犬の　子		上村　勝	５４
時にあたりて二重の喜び		木崎あい子	５５
あ　と　が　き			５５

２０周年を祝う辞

創立二十周年に寄せて

学校長　郡　保　雄

昭和三十七年四月一日、春暁の下に産声をあげました本校が、成人式にあたる二十周年の輝かしい年を迎えました事は、誠に感慨深いものがあります。

この間、創草期より現在に至るまで、高まいな理想を目ざし、幾多の困難を克服して、本校の充実発展に寄与されました地域の方々・ＰＴＡ・旧職員・同窓生の皆様方に対し、衷心より敬意を表します。

二十年前に行われました晴れやかな開校式の模様を、私達は、沿革史によってしのぶ事ができます。その一、二をひもといてみましょう。

熊本市教委平田課長の祝辞より「溌剌と栄えゆく校運を願って若葉小学校と名づけられた。新しい校区の発展と共に学校も大きくなってゆくだろう。最初の生徒である皆さんのがんばりが、この学校の基になる」

福田校長の式辞より「若葉小学校の誕生おめでとう。若葉は、生き生きとして汚れなく、日毎に伸び広がる発展の姿であり、豊かな未来を象徴するものである」「二十五名の職員と全児童は、光栄ある創業を担い、喜びも苦しみも、共に分かち合う同行者である。われわれは、使命感に燃え、温かで家庭的な親和と、深い信頼によって強く結ばれ、個性とその能力をフルに発揮して、本校の基礎づくりにまい進しよう」

児童の目標、一、明るい子。二、努力する子。
（汗をいとわぬ子、ねばり強い子）

そして、二十年間の本校の発展を最もはっきり証明してくれるのが、けやきの木を中心に、校庭をとりまく樹木の数々です。当時の写真を見ますと、子供達の腕ほどもない小さな苗木が、今では、亭々とそびえる見事な大木に成長しています。まさに「緑豊かに伸びゆく学校」そのものの二十年間であったわけです。

さて、過去の栄光から、目を現実に向けなければなりません。現在どうしても避けられない問題として、家庭内暴力、校内暴力と非行の低年令化などがあげられます。それらを考えますと、教育崩壊の危機され感じられます。しかし、本校では幸いな事に、永年に亘り「師弟同行」の姿で続けられた緑化運動や青少年赤十字活動があります。それらの活動を通して、自然愛や人間愛と奉仕の心が培われています。この伝統の姿を守り抜くことによって、現在の危機を乗り切る事が出来ると確信しております。

今、二十周年に合わせるように、鉄筋三階建ての校舎建築が始まりました。白亜の殿堂への大きな期待と同時に、また、二十年間馴れ親しんできたなつかしい木造の学び舎への惜別の情も抑えることができません。解体されゆく校舎に涙した児童もたくさんいました。しかし、この工事は、本校の大きな脱皮です。校内に響きわたる建設の鎚音は、若葉小の未来への大きな飛躍を告げる鐘の音にも等しく聞こえてまいります。

この記念すべき日にあたり、私達全職員、児童は一致団結して、三十年後、五十年後の若葉小学校を目ざし、前進することをお誓いいたします。

最後になりましたが、本校の教育実践像である「師弟同行」を、沢田一精県知事に御揮

亳いただきました。すばらしい扁額を賜わりました知事に対し深く感謝申しあげます。尚本校設置以来御指導いただきました星子市長並びに熊本市教育委員会に対し、深甚の謝意を表し、皆様方の今後の御指導と御支援をお願いいたしまして、二十周年に寄せる言葉といたします。

創立二十周年に想う

ＰＴＡ会長　国　武　史　重

若葉小学校創立二十周年、おめでとうございます。創立以来本校の発展に携わられた教職員の方々の情熱と、それに応えた卒業生諸氏の努力に、心から敬意を表する次第です。又、ＰＴＡの協力、地域住民の方々の温かい御援助も、この二十年間の歩みのなかに、確かな足跡を残していると思います。

昭和三十七年四月、泉ケ丘小学校より独立した当時は、設備、その他、無からの出発と言っても過言ではない位、暗たんとした状態であったと聞いております。それからの道は決して平担なものではなく、むしろ苦難、苦労の連続ではなかったでしょうか。たまたま二十周年の年に在籍したＰＴＡの一員というだけで、この記念の行事のお世話をさせていただく事を本当に心苦しく思いますし、尚更、諸先生、先輩の数多い業績に対し敬服致すところでございます。

熊本市にはすでに、五十周年、百周年の学校も多いと聞いています。そういう歴史の古い学校に比べれば・まだ幼なさが残っている本校という事になるかと思いますが、二十年といえば人間で申しますなら、丁度成人式を迎える年令という訳です。これからの大いなる飛躍が期待される期でもあります。

この一つの大切な節目のときに、本校二十年の歩みの中でみられた、たくさんの人達の善意、献身、愛情、意気、協力、こういったものを思い起こし、そしてこれらに触れながら、その一つ一つの持つ意味をもう一度考え直すという事は、現在及び将来の子ども達や、私達親達が、本校創設以来の伝統を次代へと伝えてゆく為の大きなよりどころになるでしょうし、又大変意義のある事ではないかと思います。

創立二十周年と時を同じくして新校舎も建築中です。新しい学舎と共に、若葉小学校が今後益々発展し飛躍することを心から念願いたします。

創立二十周年に寄せて

熊本市長　星　子　敏　雄

熊本市立若葉小学校の創立二十周年を心からお慶び申しあげます。

顧みますと、戦後の本市が東部地区に発展を続けたのに伴い、本校が泉ケ丘小学校から独立して、 新設校として開校をみたのは、昭和三十七年四月のことでありました。爾来本校は、「知性に富み、人間愛と奉仕の心に満ちたたくましい日本人を育てる」ことを基本目標として、独自の特色ある校風を確立し、輝かしい歴史と伝統を築いて来られました。この間には、全国学校林活動環境緑化コンクール入選、県学校環境緑化コンクール秀賞受賞、市緑化コンクール市長賞受賞など、幾多の表彰の栄に輝かれるとともに、昭和五十一年には青少年赤十字を導入して、以来児童の奉仕の心の涵養に努めるなど、数々の実績を

積まれたのであります。

なかでも、本市が児童の体力向上と土に親しむ心の涵養を目指し、児童達の素足での活動を容易ならしめるため、校庭芝張事業を始めるや、本校は率先してこれに当たり、以来よくその育成に努め、今は数少ない芝保全校として多大の教育的成果を挙げられたのであります。

そのような堅実な歩みのうちに、地域の発展とともにいよいよ校運も隆昌をたどり、ここに輝かしい二十周年を迎えられたことは、これ偏に歴代校長先生はじめ教職員各位、ＰＴＡ並びに地域の皆様の献身的な御尽力と母校愛の賜であり、改めて深甚なる敬意と謝意を表す次第であります。

戦後三十七年、我が国はかつてない繁栄を遂げたのでありますが、一方では青少年の非行が大きな社会問題となるなど、我が国の戦後教育は今大きな曲り角に立ち、その在り方が国民一般の大きな関心と論議を呼んでおります。次代を担う青少年の健全育成は、今や我が国緊要の課題であります。

もとより教育は、ひとり学校だけに止まらず、広く社会、家庭の三者が渾然一体となることによって、はじめてその成果が期待できるものであります。

本校が、この記念すべき時を契機として、先生方を中心に地域の皆様の一致協力のもと、更に本校の発展と児童の健全育成に努め、そして明るい社会の実現に寄与されんことを切望してやみません。

終わりに、関係者各位の一層の御健勝と御活躍を祈念して、お祝いのことばと致します。

記念誌の刊行を祝う

熊本市教育長　威　松　和　夫

本年、創立二十周年に当り、有志の積極的な努力により、創立以来の貴重なあゆみが集録され、記念誌として刊行されることは、まことに喜びに耐えません。

人間の絶えることのない歩みの中で、一つの時期を画して足跡を後世に残すことは、その時代に生きぬいた世代にとっても、明日からの若葉小に学ぶ子どもにとっても、最もすぐれたよりどころとなります。

若葉小学校は、昭和三十七年四月に泉ケ丘小学校より独立し、新興の地にふさわしい校名としてスタートしたのです。それから二十年、卒業生も二五〇九名を教えます。

創立のころは、世界も日本も高度成長の波に乗り、科学技術も非常に発展した時代でした。日本は更に、技術大国、経済大国と急成長しました。しかし、現在教育の面では、教育再建が問われているのです。

この間、本校は、特別活動や算数の研究発表をしたり、熊本市緑化コンクールの最優秀校として、連続何度も表彰され、環境の面でも、県下にその名を高めています。

また、本年度は、生活指導の研究発表も予定されています。「豊かな人間性の育成」という当面する教育の課題に応えるすばらしい学校であると信じています。

このような伝統を築いてこられたのは、歴代の諸先生の薫陶があり、また、地域の方々の一途な愛校心とともに、教育に対する理解と熱意の蓄積があったからと思います。

これからも、校区のみなさんの御協力やご支援をえて、さらによき校風を造っていただ

くとともに、末長く、母校の発展のために尽くされるようお願いして、お祝いのことばといたします。

創立二十周年を祝す

若葉校区自治会連合会　会長　池　田　国　雄

若葉小学校が昭和三十七年四月に、泉ケ丘小学校の分校からその名の如く若々しい新生の息吹きを始めてから、丁度今年は二十年目に当ります。本日ここに、諸先生、生徒の皆さん、ＰＴＡ並びに校区の皆様方とともに、若葉小学校創立二十周年を迎えることができましたことは、まことにおめでたく、心よりお喜びを申上げます。

私ごとを申して甚だ恐縮でございますが、私は偶然にも若葉小学校が発足した昭和三十七年に、この学校の附に土地を求め家を建てましたが、当時はまだ学校の周辺には住家もなく、その附近一帯は「さつまいも」の畑で、いうなれば、校舎はさつまいも畑の中の一軒家的存在で、現在のような塀もなく、周囲には雑草が深々と生い茂っておりました。

このような自然環境のもとで、創業期は勿論のことその後の長い歳月を今日まで、孜々として〝学校づくり〟に情熱と努力を傾注してこられた歴代の校長先生初め諸先生並びにＰＴＡの皆様方に、満腔の敬意と、心からなる感謝の意を表したいと思います。私は昭和三十七年に当地に引越して参りまして以来今日まで、微力ながら町内のこと、また校区内各種団体のことなど、いささか長期にわたり校区発展のため努力を続けて参ったつもりであり、従って、歴代にわたる学校御当局並びにＰＴＡ皆様方の並々ならぬご苦労と御努力は、十二分に存じあげておるつもりでありまして、ここに重ねて、厚く御礼を申しあげたいと思います。

学校が発足した当時、市や校区の有志から寄贈された各種の幼木や苗木も、二十年を経過した今日ではそれぞれ大地一杯に根を拡げ、二十幾重の年輪を嵩ねて青々と茂り、立派に成長してまいりました。それに校舎も、目下鉄筋コンクリート造りの立派な建物が新築中であり、完成のうえは内外ともに素晴らしい小学校となります訳で、ここで学ぶ生徒達も、若葉の名の如くすくすくと伸びて行きますよう、そして、若葉小学校がこのうえともに発展充実して行きますことを心から祈念して、私の創立二十周年記念のお祝いの言葉といたします。

師弟同行を基本目標に

若葉校区社会福祉協議会　　会長　高　松　　実

若葉小学校創立二十周年記念式典を挙行され、おめでとうございます。この偉大な式典に、私共実行委員に加えていただき身に余る光栄と感激しております。

二十周年と申しますと、人間にすれば成人式にも相当する大切な行事と思います。戦後東部地域には健軍、秋津の小学校のみでございました。其の後急速な発展と共に昭和三十一年に泉ケ丘小学校が創立されましたが、通学児童の増加にともない、地元の切なる要望と市当局のご理解により、待望の若葉小学校が昭和三十七年に創立されました事は、皆様ご承知の通りと思います。

創立当初より、校区の皆様や初代校長先生はじめ関係教職員の諸先生方のご苦労は申す

までもなく、歴代校長先生及び教職員の皆様のご奮闘と、これを支える歴代のＰＴＡ及び関係ご父兄のたゆまないご協力により、今日の若葉小学校が出来た事を深く感謝しております。

現在若葉の教育の基本目標には、知性に富み人間愛と奉仕の心に満ちたたくましい日本人を育てる。努力目標として〝徳性を伸す。知性をみがく。体力をつける〟。教師像には〝子供に敬われ、親に信頼され同僚に愛される〟。学校像は〝緑ゆたかに伸びゆく学校〟。児童像は〝努力する子、明るい子、たくましい子〟。家庭地域像〝明るく楽しい家庭、健康で安全な教育環境、地域ぐるみで子供の善導〟。実践像として「師弟同行」。これは沢田熊本県知事の扁額にもあります様に、学校当局は各目標は忠実に実践されてこそ、若葉の教育も充実し、又緑ゆたかな伸び行く学校として最高位の賞を受賞され、市県内に於ても代表的な優秀校に選ばれました事は、皆様ご承知の通りです。これも学校関係当局と地域住民と調和と絶大なるご努力とご協力の賜物と、深く感服しております。

この、よき環境の下で学園を卒えて学窓に、又社会に送られた卒業生も二〇〇〇余名、何れの人も若葉小学校の面目にかけてのご活躍をされております。幸多かれとお祈りします。

本記念行事に於ても、若葉まつり、大運動会、記念式典、学習発表会、作品展示会、記念誌刊行、若葉読本編集、尚数回に亘るバザー開催等々多彩な催しがあり、何れも優秀な成績を挙げておられます。

学校当局、ＰＴＡ、地域住民一丸となって、意義ある　式典が挙行されました。関係の皆様に厚く感謝申上げると共に、今後共校区発展のためのご尽力方お願い申し上げてお祝いの辞といたします。

身　近　抄

生嶋あや子

春の雷激しき雨なりわが周囲有縁無縁次々逝きて

遠く来て一夜泊りの惜しまるる平戸の海は波静かなり

あけ放つ窓ゆ降りこむぼたん雪心はずみて手にうけにけり

秋晴れのひと日音なき山の路木々は枯葉の匂いこぼせり

漂ひてはるけき思いにさそうなり木犀の香のつよき一日

回　　顧

祝　二十周年

初代校長　　福　田　　覚

若葉小学校創立二十周年記念号に、創立当時の思い出を寄稿できます事を、光栄に且つは有難く存じます。

創立前、現在地は泉ケ丘小の分教場でありました。創立と申しましても、分教場時代そのままの形での独立で、何もかも不足不備。しかし新しく集まった学校職員・児童・ＰＴＡの皆さんは「新しい学校の基礎を作るのだ。熊本一の学校を作るのだ」と大変な意気ごみで一致協力致しました。

その第一歩は、精神的支柱をつくる事でした。それは校訓・校歌・校旗の決定、国旗掲揚台の設置等でした。校訓は〝一、明かるい子、二、努力する子〟としました。心身共に公正健全であって始めて明かるい人間となるとの信条からです。掲揚台、校旗は市内小学校としては最高のものができました。これは、ＰＴＡ、町内有志の大奮発によるものです。

第二は校内施設の整備です。校舎は最北棟の西半分しかなく、二年生・四年生は泉ケ丘小で教室を借用、先生も児童もどちらの生徒か戸惑いを感ずる始末。それで校舎建築の促進に努めました。運動場は、麦畑の跡を地ならしした程度のものでした。専売局より塩の提供、井関農機会社より大型耕転機やローラー（共に運転手付き）の提供を得て、運動場作りを始めました。まず土面を耕し、職員、児童で塩の塊を粉砕して全面に散布し、耕転機が塩と土を撹拌混合し、ローラーが走り、そのあと全生徒で隊列を組んで威勢よく　「よいしょ、よいしょ」「わっしょい、わっしょい」と掛声勇ましく踏み固めたものです。雨が降っても一時間もすれば運動ができる最高の運動場となりました。その効果に遠近の学校からの視察が続きました。

緑の学校づくりは、ＰＴＡの皆さんから庭木を間引いての寄付、市当局よりの苗木の贈与等で集った木を、庭の西側に仮植えし、その数は、数千本になりました。それで運動場周囲は成長の早いイタリヤポプラ、緑陰用の木は南側に、植物園用のは西側に、造林用のは校舎の北庭に配置移植をしました。この作業は、晩秋から翌早春まで職員、生徒総動員で毎日汗を流しました。その後卒業生（寄贈）の記念並木が加わりました。特に、植物園は各種の樹木がせり合わず長く育つように考え、監物台植物園の専門技師に配置設計をしていただいたものです。

プールは子供にとり夏の天国ですが、これが無いので泉ケ丘小や秋津小のプールを時間借用しての肩身の狭い思いでした。市教委当局よりプール設置の決定があってから、学校、ＰＴＡと相談し、低学年用子プールを併設する事にし、その財源づくりに工夫奔走しました。この親子プール横には、市水道の断水時でも給水できる水量豊かな井戸ができました。一年生から水に親しみ、いつでも換水補水のできる素晴らしいプールは、正に市内随一と思いました。

以上施設整備の数例を述べましたが、それに伴い児童の意気大いに上がり、市全体の相撲大会では優勝をし、東部ソフトボール、ドッジボール大会にも優勝。先生方もこれに負けず、特別教育活動の公開発表会を開催、好評を得ました。

このほかにもいろいろと言い尽くせませんが、創業の重責を果し得た喜びは、当時の職員、生徒、ＰＴＡの皆様にとり懐かしい思い出として終生忘れ得ない事でしょう。共に共に若葉小学校の一層の発展をお祈り申しあげます。

若葉校の敷地について

若葉小学校は今よりもっと西側中央通りの行き当たりの付近に出来る話もあったが、酉無田の人たちの働きかけもあり、現在地に決まった。土地は九人の地主が提供したもので約六千坪（二万平方メートル）あり、その際南門前の三十五坪は無償提供された。値段は一坪二千五百七十円。

創立二十周年にあたって

第二代校長　古　里　里一

若葉小学校創立二十周年を迎え、心からお祝いを申しあげます。初代校長の福田先生の病気の為、四十一年八月から、私は二代目として、若菜小学校に赴任いたしました。初代校長先生を中心に、諸先生方が新設校のご苦労の中に、基礎固めに余念のない時でした。

初めて校門を入った時、運動場のポプラ並木、整備された教材樹木園が、とても印象的でした。管理棟もなく、朝礼時に気分が悪くなった子供たちを、プレハブの保健室にいれ、かえって気分が悪くなった子供の事が今でも忘れられません。プレハブの職員室兼事務室で濡れ手ぬぐいを頭上にのせ、左手にうちわであおぎながら、仕事をした珍風景はなつかしい語り草となりました。

天気予報に左右されながら、卒業式を青空の下で行ったことも、今でほ考えられないことの一つです。天気予報によって、子供たちの椅子を、出したり入れたりしたのも今にして思えば、笑い話かもしれません。　今、体育館が建っている東側に通用門があり、一般の人が、近道として通りぬけていました。痴漢さわざがあり、東門を閉めることにしたところ、近くの人たちから思いがけない抗議があったことも、忘れられません。翌年には、体育館建築が本ぎまりとなり、けりがついたものでした。

運動場の南入口に南門があり、近くの地主さん方のご厚意によって通学道路が出来、急に南門が利用されるようになったのも有難い思い出の一つです。続いて管理棟が出来、先生方を始め子供たちが非常に喜んでくれ、当時の一年生の中に、朝夕校長室へ挨拶に来ていた女の子も、今はりっはな銀行員となって本店勤務に余念がありません。当時、今の校区よりも広く、沼山津、今の東町、花立方面からも通学しており、家庭訪問の時など、先生方はほんとうにご苦労であったと思います。又、　〃かぎっ子〃と呼ばれた子供たちのために、場所を提供していただき、当時市内でも二番目の〝かぎっ子教室〟の開設も、指導者探しに苦労した思い出の一つです。

草創の途中、学校を去りましたが、次々にすばらしい先生方が赴任され、学校造りに精

進されたお陰で、今日のような立派な学校ができあがったことだと思います。これからも、新しい世紀に向かって若葉小学校の躍進を心から祈ってやみません。

学校長病む　校庭に一輪　黒いバラ
横断路　黄傘つゞくや　菜種づゆ

創立二十周年を祝す

第三代校長　　阪　本　鶴　夫

若葉小学校の成人式を、心からお慶び申し上げます。併せて、学校の歴史と伝統を支えて頂く校区のみなさまに、衷心から感謝申し上げます。

若葉小学校は、私の生涯で格別の思い出のページを残した大切な学校であります。新米校長のスタートとして四十四年四月一日に就任し、それから三か年、四十七年三月三日創立十周年記念式典を盛大に挙行させて頂く幸運に遭遇しその大任を果すまで、その貴重な歳月は、今もなお鮮明に脳裡にあって、辿っていける私であります。

顧みますとき、若葉小在任の三か年は、随分とひとさまの御恩を蒙った格別な時代であったと、感謝一入であります。校長の使命感も、人間性もここでこの時に大きくさせていただいたことを、終生忘却することはありません。

新任校長第一年目は、私の未だかつて経験しなかった二つの出来ごとに出会ってスタートしました。その一つは、ある事情から旧年度末からＰＴＡ活動が完全に停止し凍結状態であった。その解決をつけることでありました。しかし、この件は校区の方々の賢明な御理解と暖かい御協力とによって、未熟な校長もどうにか難題解決のよろこびを得るに至り、夏休み前にＰＴＡ新組織再出発に祝福を贈ることができました。

その時を同じくして、「体育館建設の確定」　の通知を市教委から受けました。待望久しかったこのニュースほ、校区の方々の結束をなお一層誘発したのでしょうか、ＰＴＡはもとより校区町内会をはじめ諸々の団体の極めて積極的な理解と強力な行動を発揚されて、「若葉校の体育館は立派だ」と言われるものにしようと、望外な寄金を申し出ていただく結果となりました。十年経過しても、若葉小の体育館の管理と活用の優秀なことを私も誇りに思っています。

新校長第二年目は、来年度の創立十周年の節目づくりを、どのようにしてどうつくるか、一本にしぼりました。基本姿勢は、若葉の子どもの成長の為に、として二年がかりの算数研究発表に取り組みました。〝式表示〟　という新課題で、先生方は、よく研磨され、子どもの成長の姿に充実感を抱きつつその成果を翌四十六年十月二十七日に発表をしたことも忘れられません。

わかばの思い出

第四代校長　　片　山　生　志

二十周年の記念、何よりおめでとうございます。私が若葉小学校に在職いたしましたのは、昭和四十七年四月より昭和五十一年三月までの四力年間、大変おせわになりました。

学校をどんな立派な学校にするかというより、私自身がどんな立派な校長になるかとい

うこと、小学校の教育というのは、最も大事なのは何か。又、どうすればよいのか、それを教えてくれたのが若葉小学校でした。あまりにもありふれた学校名とは思いましたが〝わかば。ワカバ〟と口ずさむ中に　〝生命の尊さ〟生き生きとのびる、まさしく早春の若葉が生々とのび出し、生命を受けて真黒な母なる大地にはぐくまれて生れ出ずる、その様なイメージをえがきました。そして校章のデザインをしたのは誰か、あの図柄は何なのか、という事をたずねましたがわかりませんでしたが、半年ほどして楠の若葉である事がわかりました。楠の若葉はまことに、子ども達のイメージにぴったりしたものだと思いました。

　赴任をした日から、子どもたちの明るい挨拶、明るい笑顔、はきはきした返事、こんなすはらしい子ども達と一緒にくらす事を誇らしく思うと同時に、もっと、もっとねばり強い、心と体、十年後、二十年後、そして二十一世紀を背負って立つ子どもたちに一人でも多く育ってもらう様にと考えました。

　勿論、私一人でできる事ではありません。全部の担任の先生の協力がいります。そこで〝若葉小学校の現代化〟を考えました。かの有名な横井小楠先生の塾「四時軒」の精神をもり込み、大義を四海にしくという、世界に国際社会に幅広く役立つ人づくりを基本にして、第一に強い体をきたえる事にしました。遊具も市内小学校で最も数多くつくりました。強歩会もできるだけ遠くのばしました。泥まみれの遊び時間もふやしました。そして裸足で運動場を思いきり遊ばせ、運動させるために運動場を全面、芝生にする事にしましたが、いろんな都合でトラックだけ残す事にしました。又、初代の福田校長先生の時できた樹木園。これを大切にしていかねばならないと思い、月一回の樹木園清掃を考えましたが、子ども達は本当にきれいにしました。

　しかし忘れてならない事は、昭和四十九年にＪ・Ｒ・Ｃ、即ち青少年赤十字に全員加盟した事です。他県の子どものとの交流、外国の子どもとの交流を通じて、世界に日をひらき、強い心をつくり、楠の若葉の如く青い葉の落ちる前に若葉がのびる様に、若葉の子はいつまでも発展してもらいたいと思います。

　最後になりましたが、御礼を申し上げたいのは、学校で考えていた事を御父兄、町内の皆様が御理解いただき、御協力いただいた事を重ねて感謝申し上げます。

重すぎた校旗

　若葉小の校旗を作るときのことです。どこにも負けない立派な旗を作ろうと思い、たまたまいっしょに注文した東野中とまったく同じものをと頼んだそうです。

　ところが、運動会の入場行進をするときになって、はたと困りました。あまり立派すぎるために旗が重く、そのため旗を持つ子どもは、あっちへふらり、こっちへふらり、はらはらしながら見守っていたということです。

思い出は泉の如く

第五代校長　水　上　千　歳

私が若葉小に赴任したのほ、昭和五十一年四月、春もたけなわのころでした。創立十四年目を迎えたばかりの学校は、校区のパイオニアとしての気概に満ちていました。早いものですね、もう二十周年。人間ならば成人の日を迎えたわけで、本当におめでたいことです。心からお祝いを申し上げます。

　城山小から若葉小へと、職場がかわり、新しい希望に心はずませて訪れた若葉小は、そ

の名のとおり、若葉の緑に包まれ精気溢れるばかりでした。学校の周囲を取り巻くすずかけの樹の若葉が、風に吹かれチャラチャラと音をたてんばかりのかっこうで、黄金のように輝きながら、又校庭一面に敷きつめた芝生の緑が、春の陽光に一だんと鮮やかさを加えて、私を歓迎してくれました。

（今日からここが私の学校なんだ）と、自分に言い聞かせ、胸一ぱいにさわやかな空気を吸ったのでした。

それから三年間、私にとっては短い期間でしたが、実に楽しい充実した期間でした。学校を愛し、理解と協力を惜しまない保護者や校区民の方々、素直で明るくかしこい子ども達、研究熱心で児童愛に燃えた先生方に囲まれて、楽しく、思い切り仕事ができましたのも、このようなよき環境に恵まれ、多くの方々のご協力と御支援があったればこそで、心から感謝申し上げております。

今静かに当時を思いおこせば

思い出は　山の泉が月に吐く　金の砂ごに似るといわまし

と、誰かが詠んだ歌のように、思い出は泉が吐く金の砂にも似て、次から次へと湧き出て、月光にキラキラと輝いて見えます。　ー

中でも、特記したい事の一つは、昭和五十三年学校緑化コンクールで、市・県の最優秀校の栄誉に輝いた事です。代々の先輩が築き残してくださった財産に、輝きを加えるため磨きをかけてきた児童や、ＰＴＡの懸命の努力がようやく実を結んだ仕事だったからです。

もう一つは、ＰＴＡの努力で校庭の東側の樹間にアスレチックが設置された事であります。

児童の剛健な心身の育成のための一手段として、アスレチックの設置を熱望する私の願いをとりあげて、ＰＴＡが、バザーを催しては財源を捻出し、労力奉仕で見事なアスレチックを完成させ、寄贈してくださったものだからです。涙が溢れ出る思いでした。

ここで、私は、これらの仕事に関連して、忘れ得ぬ人物の一人である、当時のＰＴＡ会長池上守氏の名を挙げねばなりません。

もちろん、忘れがたい多くの人々に恵まれましたが、中でも氏はＰＴＡ会長として、その秀れた英知と手腕、謙虚な人柄で、学校運営に大きなお力をかしてくださいました。先の大きな仕事も、このＰＴＡ会長と、又このＰＴＡ会長のもと一致協力してこられたりっはな会員の方々の大きな御援助があったればこそできた事でした。

先にも申しましたように、よき校区民、よきＰＴＡ、よき職員、かわいい児童たちに囲まれて暮した三年間は、私の教職の最後を閉じるにふさわしい花道でした。

ありがとうございました。　学校を退職して三年、次第に遠ざかっていく学校ですが、美しい楽しい思い出に心を暖めているこの頃です。

最後になりましたが、成人になった若菜小が、ますますの発展を遂げられるよう、心から祈って筆をおきます。

掲揚台の石

国旗掲揚台を作る時のことです。当時の在校生が全員小さな石を拾って、それぞれの名を書き、掲揚台の下に埋めたそうです。きっと、すばらしい若葉小になってほしいというねがいをこめて埋めたのでしょうね。

若葉小の思い出

第六代校長　前　川　信　行

若葉小に就任したのは、昭和五十四年の四月二日であった。辞令交付を受け、その脚で若葉小に向かった。校門脇には桜の花が咲き、広々とした芝生。背後の欅の森。校舎前の花壇。玄関を一歩はいると窓越しに見える見事な桜の花、文字通り、若葉学園という印象を受けた。歴代職員の方々の努力の結晶である。運動場で遊んでいた子ども達が、元気に挨拶してくれた。子ども達と早く仲よくなりたいと思った。

昭和五十四年は、新指導要領による教育課程実施の年である。若葉小独自の教育課程を編成しなければならない。先代校長の経営方針を継承し、「人間性豊かで、知性に富み、たくましい奉仕にみちた日本人を育てる」本校の教育目標に向って、創意と特色ある教育課程の編成に力を注いだ。その特色あるものとして考えられ、今でも頭に残っているのは「若葉タイム」と「若美まつり」である。若葉タイムほ、全児童が、体力に応じた運動や芝生の雑草取りなどに汗を流した。また、「若葉まつり」ほ、芝生の美しい六月上旬、週間行事として計画をたて、最後の一日を盛大な一日行事として実施した。

初代校長福田先生の開校時の講話。大川教諭作詞作曲による「はだしになって」　「若葉よ」の歌の発表。樹木ぁて。学年代表の緑化の作文朗読。クラス対抗リレー学級毎の木陰による親子会食、懇談、そして午後のオミコシワッショイなど、心に残る行事であった。

校内研究は、国語を中心に、全職員が授業研究を実施し、子どもの為に指導力の向上を図った。

ＰＴＡや校区の方々の学校へのご協力には、今でも感謝の気持ちでいっぱいである。特にＰＴＡの活動で忘れられないのは、単Ｐ独自の研修会を実施されたことである。四つの分科会毎のテーマで、四会場に分かれて実施された。二百名近くの参加があったように思う。日頃の悩みや問題点を出し合って熱心に協議をされた。最後に、体育館で全体会を行い、各分科会毎の報告まであ他校でほ見られない研修会であった。講師の先生から、今までこんな単Ｐでの研修会は初めてであると。

若葉小は二十周年の成人式を迎えた。そして校舎改築の二重の慶び。若葉小が、これを契機として益ゃ発展することを祈念いたしております。

優しかった泉ケ丘小の人たち

創立前の分校時代はもちろんですが、創立後も、しばらくは泉ケ丘小に二部の学年がおせ話になっていました。

当時の泉ケ丘小の人たちは不自由な創立期の人たちにとても優しく、そのために、「ちゃんと自分の学校をもっている子どもたちなのに、あまり世話をしすぎる言という意見もあったそうです。

いよいよお別れの時には、鼓笛隊が演奏し、全校児童が見送ってくださる中を、校長先生やＰＴＡ会長さんを先頭にして出て来たそうです。そういう暖かい心を私たちも忘れない。

枚区のあゆみ

若葉校区のあゆみは、昭和十七年までの農業中心の時代、十七年から二十八年までの変動の時代、それ以後の商業地域としての発展の時代の三つに分けることができます。

１、農業中心の時代

肥後国誌というむかしの本を見ると「沼山津手永の中に西無田村四百玉石余、間島とい

う小村あり」　とか、「雨の官祭九月十九日氏神なり」という記録があります。

西無田村というのほ、若葉校の南側の一帯で、今も農業を営んでいらっしゃる方が多いので、みなさんにも分かるでしょう。

この地区の南側では、木山川（秋津川）、赤井川（木山川）、矢形川の三つの川がいっしょになり、西側の江津湖の水とともに加勢川に流れこんでいます。

そのため、むかしは、これらの川を上り下りする舟も多く、各地からの農産物などが運ばれていました。間島というのは、校区の南東、赤井川、矢形川ふきんの地名で、船着場があったということです。今も間島橋という名がのこっています。

しかし、これらの川のふきんは土地が低く、度重なる大水にいつも苦しめられてきました。西無田だけでなく中無田、東無田、三郎無田など近くに無田（牟田と書くこともあります）という地名がたくさんありますが、これは「地租が無い田」という意味で、大水がでる度にお米が少しもとれなくなるために、地租が安くなっている土地だそうです。現在でも三年に一度ほ大水のひがいを受けるのですよと土地の人は語っていらっしゃいます。

この低湿地について次のような話も聞きました。

江津湖のともを託摩のともといいますが、これは、下の田（画図・田迎方面）を守るために作られたもので、大水が出るとあふれた水は、これらの無田にたまり、他の土地にあふれ出ることを防ぐ働きをするので、いつまでも低いままで置かれてきたという話です。

むかしの校区の人々もたいへんな苦労をしてこられたのだろうな、とつくづく思ったことでした。

さきほどの間島という土地も、低すぎて人が住みにくいことや、川の工事が行われたこともあって、住む人もいなくなり、西無田や新村に引越してしまわれたということです。

明治になって、西無田村は、上益城郡秋津村の一部となりました。秋津村というのは沼山津の津と秋田の秋をあわせたもので、秋田は西無田、上り無田、中無田をまとめた地名です。

大正の終わりから昭和にかけてのくらしぶりを聞いてみました。

今から六十年ぐらい前は、村の戸数が五十戸ほどもあったでしょうか。村に入る道は今の動物園前の電停あたりからでした。道は深く両側は三、四メートルぐらいの高さの土手になって、そこに畑がありました。

今の学校から北の方は飽託郡の健軍村との入会地（きょぅどうでたがやす土地）となっていて、江津湖の土とうまやごえをまぜて作ったたいひを年に三回も入れては、いっしょうけんめいに土地をこやしたものでした。

朝は月をいただいて家を出、夜は月が出てから家に帰るという毎日で、畑仕事のほかに家の仕事をしたり、畑に食事をはこんだりする女の人の苦労はたいへんなものでした。

とれた野菜などほ馬車に積んで朝四時ごろに家を出、朝市に運びました。提灯をつけて行くのですが、ひどいときは、車輪の軸のあたりまで泥の中に入りこんだりしたものでした。

そういうくらしですから、どこの家でも馬をかっていましたし、とても馬をだいじにしたものです。

楽しみというと雨宮神社のいろいろな行事や、地蔵まつり、時折りやってくる芝居などでした。雨宮神社の行事のおもなものは六月十五日の草の輪くぐり（竹のわくにかやをま

いて作った輪をくぐって、災難をのがれるようにいのるもの)、十月三日のすもう、正月、五月、九月の宮ごもりなどで、持ち寄ったごちそうをたべたものです。地蔵まつりは十月二十四日に行われ、背よりも高い竹の花立てに花を飾って、供物をそなえ家々におかしをくばったりします。

そのころの行事のほとんどは今も引きつがれていて、雨宮神社のおまつりは南・北・新屋敷組の三つに分けてこうたいで宮座（当番）をつとめます。と話してくださいました。

広々とした畑、竹やぶや、森の木々のかげにあるわらぶきの家々、木山川や、赤井川をくだる舟のすがた、そんな村のようすが目の前に浮かんでくるようですね。

２、変動の時代

昭和十七年六月のことです。昭和十六年十二月に始まった太平洋戦争はますます激しくなり、健軍町（昭和十一年十月一日に熊本市に編入され健軍町となる）に飛行機工場が出来ることになりました。四百八十万平方メートルの農地が買い上げられたといいますが、若葉小学校の広さが約二万平方メートルですからくらべてみるとその広さがわかるでしょう。

工場は、今の自衛隊や東町団地のあたりでしたが、学校の北側の県道（今の電車道路）

までの土地には会社の人たちのための住宅が続々とたてられ、土地のようすは一変しました。動物園付近から秋津校区にかけて二千五百三十戸の家と十二の寮がたち、一万五千人近くの人が住んだといいます。店も何もない、いも畑や竹やぶの間に、あちこちとたてられた住宅のようすを想像してみてください。

その工場のために､それまで水前寺公園までだった電車を健軍まで延長することになり､百貫港まで敷かれていた線路を取りはずし、それを使って線路が作られました。土地の人々も作業にかり出され、大変だったそうです。

二十年の五月に市電は開通しました。

しかし、七、八月の空襲で住宅の多くは焼かれ、八月十五日には戦争も終わりました。飛行機工場は仕事をやめ、焼けあとはまたいも畑となり、戦争で家を失った人ちが残った住宅に住んだりしました。ふとんも持たないような人たちがむしろをかぶったりしていた様子は思い出したくもありません、と今でもお年寄りの方から聞くことがありますが、校区にとってもいちばんむごい時代でした。

ところが､それから十年あまりで､校区はまた新しい発展の時を迎えることになります。理由の一つは、市電が残ったことでしょう。昭和二十七年にはそれまで単線だった線路も複線になりました。理由の二つ目は、昭和二十八年六月二十六日の大水害です。死者・行方不明五百三十七人を出し、熊本市の中心部は二メートルから三メートルの泥海となった白川の大洪水は町の人たちの目を東部に向けさせたのです。

３、商業地域としての発展

三菱の寮の中で焼け残った三つの寮（秋津寮・五寮・八寮）の他に県営や市営の住宅ができ、工場の住宅跡も農協を通して人々に払い下げられ、少しずつ住宅地らしくなって来たわけですが、昭和二十三年頃には健軍本通りに店は二・三軒だったといいます。

当時から店を開いていた人の話によると､昭和二十六年頃に商店の組合を作ったときは、もう二、三十軒にはなっていたようです。しかし、当時にぎわっていたのはむしろ、中央通り（もっと西の通り）でした。

店を出していた人も、根っからの商人の人は少なかったそうですが、みんなで力を合わせて、道をよくしたり二十九年ごろにはすずらん燈もつけたりしたそうです。

また､電車の終占…の交差点では､お盆などに舞台をかけてもよおしものなどをしたが、バスが来るとよけながら楽しんだそうです｡ちょっと今では考えられないような話ですね。

水害後、多くの人々が東部に移り住むようになるとともに商店もふえ、本通りにあった県営住宅や市営住宅も商店に変わり、アーケードも作られました。四十三、四年頃にはオーニング街ができ、街路燈もつけかえられ、市内では通町につぐにぎゃかな商店街となったのです。

現在、本通りには八十軒あまりの商店があるそうですが、県道すじや、本通り周辺を加えると三百軒ぐらいになるのではないかというお話でした。

４、まとめ

校区のあゆみを三つの時代に分けて見て来ましたが、今でも二つの姿がはっきりと見られます。古いしきたりが残る西無田（昭和二十九年十月一日に熊本市に編入）めざましく移り変わる商店街の二つの姿です。若葉という町名も昭和三十一年に生まれ（校区ではありませんが校名のもとになったのでしょう)、昭和四十八年に現在のようになったもので、歴史の新しい町名です。しかし町名は新しくとも、様々な時の流れの中でがんばってきた多くの人々の力によってできた町だということを忘れないでほしいと思います。

雨宮神社について

雨宮神社は、健軍神社の流れを汲むお宮で、古くは十月三日に馬まつりが行われ、馬をつれて村人たちが参拝したものですが、今ではすもうだけが行事として残っています。この雨宮神社の起源については次の様な話が残っています。

菊池武房の子武経から十代目にあたる島崎半右衛門正経は清正の船頭頭として働いていたが朝鮮出兵の際、一本の浮木が船についてきて離れないため、これにはきっとわけがあるのだろうと思い、その木を持ち帰り、神体をきざみ浮木の大権現様としてまつったもので、正経は清正から七十石を受け、その後間島で運送をしてた。

代々島崎家の守護神であったが、西無田に移転の後、西無田の氏神としてまつられるようになったもので、雨宮様とも浮木の大権現様ともいう。

学校のあゆみ

１、若葉小学校の誕生

大阿蘇の朝日さすこの地に、若葉小学校が誕生したのは、昭和三十七年四月でした。

それより以前、昭和三十五年、現在地に泉ケ丘小学校の分教室として発足、以後二年間の分教室時代を経て、昭和三十七年四月一日、初代校長に福田覚先生を迎え、その名も若葉小学校として、熊本市の四十三校目の小学校は誕生しました。そして四月十日には開校式と第一回の入学式が実施され、若葉小学校のあゆみの第一歩を踏み出しました。

２、校舎の建設

昭和三十五年、分教室として発足した時、先ず第一校舎十教室が建築され、翌三十六年に第二校舎の一部四教室が増築、若葉校として開校当時はこの十四教室で授業が始められました。

しかし、これだけでは全校児童を収容することができず、一・三・五・六年は本校で、二・四年は泉ケ丘小学校に分かれて授業を行ました。

この年六月には給食室ができて給食が始まります。　翌三十八年四月に第二校舎の残り六教室が竣工し、はじめて全学年十七学級が本校でそろって授業を始めました。しかし、当時は今のように音楽室や理科室、図書室、家庭科室や保健室、体育館などの特別教室は全くなく、また管理室も校長室と職員室と事務室を１緒にした一室があるだけのありさまでした。設備も勿論不充分で、特に児童机も足りず、市内のあちこちの学校から古い二人用の机を貰って来て間に合わせる始末でした。

三十九年四月には理科室が完成しますが､それでも急激な児童数の増加で教室が不足し、八月には理科室東側にプレハブの仮教室三室が建設され、急場をしのぎました。

四十一年四月には第三校舎の四教室が完成、また四十三年四月には管理棟である第四校舎が完成して校舎建設が完了しました。

そして第一校舎建築より二十二年、幾多の風雪に耐えて子ども達の思い出を育んで来た校舎も次第に老朽化し、五十六年十二月には改築のため第一校舎と第二校舎が解体され、今、新しい鉄筋校舎に生まれ変ろうとしています。

３、運　動　場　作　り

若葉校ができた頃、周囲にはほとんど家がなく、正門の通りに２軒、基地南側に数軒あるだけで、あたりは一面の畑でした。

校地が畑の中に設定されたため、広い運動場を有していたことは、たくましい児童の育成の上で大変幸いなことでした。しかし困ったことに、地ならししただけの運動場には容赦なく雑草が生い茂り、一度雨が降ると泥沼となり、また日照りが続けば砂ぼこりが舞い上り、冬には霜どけがひどく体育の授業も満足にできない有様でした。ところがたまたま熊本専売局の発意と厚意により、運動場の塩処理という初めての試みが若葉校で実施さることになりました。

これは運動場の土に塩を混ぜることにより防塵、凍結防止、雨後の乾燥、雑草の防止等の効果をねらった試みでした。

第一回の作業は三十六年八月、焼けつくような炎天の下、教職員、児童及びＰＴＡの協力と井関農機の耕運機の援助により塩の散布が行われました。何しろ八月の真夏日に、掘り起こされた土に塩を砕いて混ぜ、地ならしした後を全校児童が並んで踏み固めて行くのですから、大人も子どもも汗と泥にまみれての労働であり、それは誠に涙ぐましい作業でした。

第二回目の作業ほ三十七年五月に、第三回目は十月に、又第四回目の塩処理は三十八年八月に実施。作業は毎回ＰＴＡの奉仕作業で行われました。このような努力の甲斐があっ

て塩処理の効果も顕著なものがありました。即ち、雑草の成育がにぶくなり、雨後の泥沼もできなくなり、雨が止むとすぐに運動場に飛び出せる便利さでした。また夏の砂ぼこり、冬の霜どけもなくなり、塩の効果はまさに一石四鳥の感がありました。県内のあちこちの学校から問い合わせや視察も多数ありました。

しかし半年に一度くらい多量の塩を補給しなければ、塩分が風にとばされたり、雨に流れたりする欠点がありその後中止されましたが、この時機に今日のすばらしい運動場の基礎作りがなされました。

4、プ　ー　ル　建　設

熊本一の親子プール

みなさんが一、二年の時楽しんだ子プールは、ＰＴＡの人たちがお金を出し合い、福岡にまでプールを見に行って計画を立てて作られたものです。

大プールにくっついた小プールや、小さな小プールはあったそうですが、若葉のようにりっぱなのは初めてで、よその学校の人たちをずいぶんうらやましがらせたそうです。

児童の体育にとって、プールは絶対に欠かせない施設であることはいうまでもありません。

若葉校でもぜひ速やかにプールを建設すべきだとの声が高まり、三十七年十二月にプール建設期成会が初代ＰＴＡ会長清田末広氏を会長に推挙して結成されました。三十八年六月にはプール地鎮祭が行われ、同年九月に竣工落成しました。

九月半ば、何とか早く涼しくならない中に子ども達を泳がせたいとの配慮から、工事は急ピッチで進められ、待望のプールが完成。子ども達は大歓声をあげて飛び込み、水しぶきをあげて喜びました。

若葉校のプールの特色は、広い補助プールを設け、低学年には水遊びを通して早く水に慣れるように配慮したことです。

これは当時としては画期的な施設であったため、他校から参観に来られる程でした。

その頃は現在と違って、建設費用のうちプール本体だけは市費で賄われましたが、プールサイドや脱衣場、便所などの付帯設備は地元負担であったため、建設期成会が校区の全家庭に寄付をお願いして資金作りがなされました。

さて、プールは出来たものの運営上困ったことは水道代の予算不足でした。一週間一回の水替えで約一万円、一夏で十数万円の水代がかかり、費用捻出のためシーズンオフにはプールで金魚を飼って販売したりしましたが、余り効果がなく、ボーリソグによる地下水を利用することになり、第二代ＰＴＡ会長小林時致氏の御尽力により翌三十九年七月にプール給水用のボーリングが完成しました。

５、体育館の建設

校舎、プールの建設が終わり、教育環境が着々と整備されて行くなかで、体育館の建設が待ち望まれていましたが、ようやく四十四年に建設されることになりました。早速第五代ＰＴＡ会長島崎辰起氏を会長に、体育館建設期成会が結成され、四十五年三月に、待望久しかった体育館が落成。ピカピカの体育館で四十四年度の卒業式が行われました。

期成会の働きかけで校区民から寄附をつのり、グランドピアノ、緞帳、暗幕、長机、折りたたみ椅子等付属設備一式が寄贈されました。

６、フィールドアスレチックの設置

たくましい若葉っ子を育てたいという第五代校長水上千歳先生の発案で、校内にフィールドアスレチックの建設を検討していましたが、費用の点で行詰っていた矢先、当時のＰＴＡ会長池上守氏のお兄さん池上昭男氏が陸上自衛隊第八師団の副師団長として着任され、協力を依頼したところ、施設隊の協力が得られ、さっそく実施に移されました。

子ども達の希望を参考に設計が進められ、古電柱とロープを組み合わせた、大小十二基のアスレチックが五十三年二月に完成しました。材料費はＰＴＡの不用品バザーの益金と同年本校より転出された西川寿男先生からの寄付で賄われました。

二月の寒風の中で、隊員さんの手で切り込まれた古電柱が組み立てられ、お父さん達は穴掘り、お母さん方は昼食の炊き出しとすべて善意の協力によって、他校に類を見ない立派なフィールドアスレチックが完成しました。

竣工にあたっては工藤靖姓氏（現ＰＴＡ会計）　の寄贈で、大坂孝氏（元ＰＴＡ副会長）の揮竜による大記念碑が建立され、完成を待ちかねた児童達は夕方遅くまで長蛇の列を作る程の賑わいでした。

７、緑　化　推　進

若葉校の歴史を語る時、緑とのかかわりを除くことほできません。

開校以来、学校、校区民が一体となって一貫して自然を愛し緑を育ててきた心が、今日のすばらしい緑の学園、若葉小学校を築きあげてきました。

若葉校区は山に遠く、自然の樹木に接する機会が少ないとの見地から、初代校長福田覚先生の発案で、自然を愛し、自然を観察する生きた学習態度を培うため、運動場の西側に教材樹木園が設置されました。

樹木園には、各家庭から寄贈された苗木を中心に、小学校の教材として取り扱われるほとんどの種類の樹木が集められ、営林局の専門家の指導を得て植付けや管理が行われました。

樹木園の木にはそれぞれ名前や番号札がつけられ、機会あるごとに校内放送や掲示、クイズ等で子ども達の緑に対する関心が高められて行きました。

若葉校のシンボルともいえる〝けやき並木〟は、第一回の卒業記念樹です。

これは当時の六年の学年主任林原照隆先生と体育主任大坂了也先生が、熊本城の監物台植物園から運んで来られたもので、その頃は幹の直径が五センチ程の小さな木だったそうです。そして二十年を経た今、あのような立派な大木に成長しました。

校庭のまわりには、市の緑化推進課の勧めでイタリヤポプラが植樹されました。

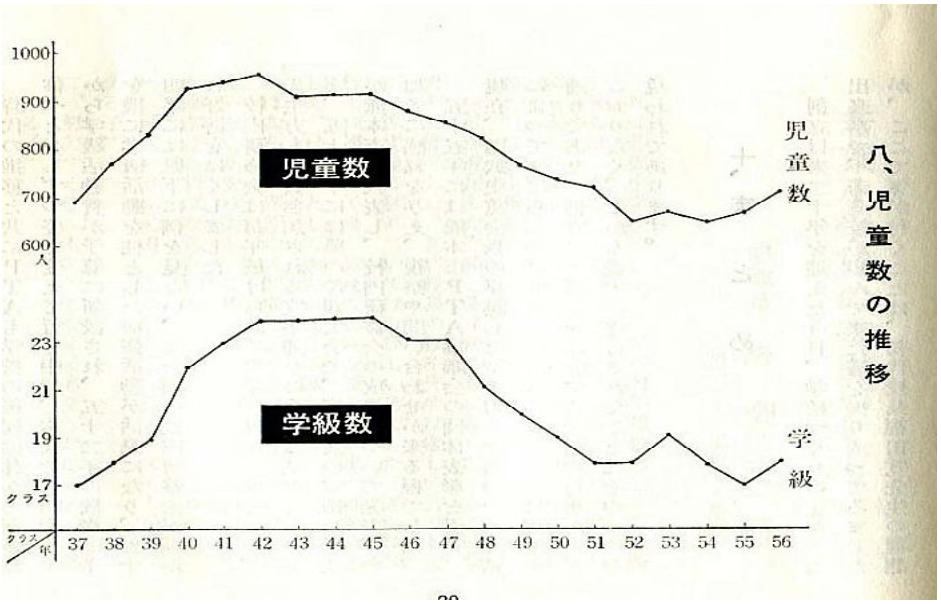
この木は成長が早く、植えたとき親指ぐらいの苗木は見る見る大きくなり、一時期、若葉の空に威風堂々とそびえていましたが、成長が早いだけに木の寿命が短く、台風や白蟻の被害で危険が生じ､年々校庭から姿を消し今では教本だけを残すのみとなっております。

このようにして一面の畑であった校地も､樹木園の生育やポプラ並木､けやき並木など､将来を見通した計画的植樹によって、若葉校の名にふさわしい緑の学園が育って行き、開校三年目の三十九年七月には、熊本市の学校園コンクールに見事優勝する程に整備されて行きました。年々樹木が整備される一方、四十三年には運動場に芝生が植えられました。

これほ塩処理にょって解消されたぬかるみや砂ぼこりが塩処理の中止によってその効果が薄れたため、新たな解消法として行われたもので、年毎にその広さを増して、四十八年にはとトラックを除いて運動場全面の芝生の植え付けが完了しました。

目にあざやかな緑のジュータンは、周囲の木々と見事に調和し、子ども達ははだしで喜々として走り回り、教育効果は絶大であり、それが認められて五十三年度には市の緑化コンクールで最優秀の市長賞を獲得、五十四年度は熊日賞、五十五年度は県の学校環境緑化コンクールの最高位である県知事賞を受賞、併せて全国コンクールにも入賞。五十六年度も県知事賞を受賞しています。

８、児童数の推移



９、ＰＴＡ活動の動き

若葉校のＰＴＡは、開校と同時に結成の準備が進められ、初年度の三十七年七月に泉ケ丘公民館で第一回の総会が開かれ、初代会長に清田末広氏を選出して発足しました。当時は教室と机だけという乏しい中での学校運営だっただけに、労力の提供はもとより、経済的な援助も多大でありました。

以来、常に学校と表裏一体となった献身的な協力により学校作りに援助して来ました。開校以来続いている夏休みの愛校日の草取りもその一例です。

四十年二月には、開校以来の功績が認められ、県ＰＴＡ総会で初代会長清田末広氏が個人表彰、同年七月には優秀ＰＴＡとして団体表彰を受けました。

四十四年には熱心さの余り意見が対立、一時活動を停止しましたが、間もなく再建され、雨降って地かたまるの例え通り、より強固な組織が出来上りました。

時代の推移と共にＰＴＡも学校の後援団体から研修団体へと少しずつ姿を変えて行く中で、本校でも四十八年から学級活動費が予算に新設され、五十二年の機構改革を機に学級活動を柱とした研修活動が活発になり、五十四年には県下に例を見ない、第一回の校内研修会が開かれ好評をはくしました。

校内研修会は毎年続けられて今年度は第三回となり、先生方も全員参加される文字通りのＰＴＡ活動として充実、五十五年には県の母親大会で、副会長の安田京子氏が熊本市を代表し、校内研修会の成果について発表、参加者に感銘を与え、視察や問い合わせが来る程でした。

五十五年には熊本市ＰＴＡ協議会の団体表彰を受賞。現在、国武史重会長の卓越した指導力と会員の一致団結によってすばらしい活動が展開されていることは周知の通りであり、創立二十周年を記念する一連の行事がとどこおりなく、しかも盛大に遂行されたことはその一つの現われであります。

１０、ま　　と　　め

創立以来二十年を迎えた今日、学校づくりの主だった出来事で、若葉校が歩んで来た道を振り返ってみましたが、ここで気が付くことは、初代校長福田覚先生の理想の学園作りの構想が歴代の校長先生の学校経営に脈々として受けつがれ、更に高められて来たことです。そしてその埋念は、これまで若葉校に在籍されたすべての先生に、極めて自然に浸透し今日の隆盛を見るに至っております。

また忘れてならないことは、校区の方々の協力であります。歴代の自治会長さんはじめ、各種団体の要職の方々、そして校区民おひとりおひとりが、地域の核としての学校作りに情熱をもやしていただきましたことが学校発展の大きな支えとなっております。

すばらしいこと、それは良き若葉校区に、立派な若葉小学校があり、そしてそこに努力する、明るい、たくましい若葉の子ども達が生きていることです。

若　葉　富　士

すずかけ広場の人気者、若葉富士はどんなにしてできたか知っていますか。あれは、プール建設の時に掘り上げた土を積んで作ったものだそうです。水泳はできるしすてきな遊び場はできるし、さぞ嬉しかったことでしょうね。

若葉小学校の基礎づくり

旧職員　坂　梨　正　行　　（昭 38・4 ～昭 42・3 勤務）

私は若葉小学校に三十八年より四年間教頭として勤務しました。この間の出来事については〝学校のあゆみ〟にも記されておりますので、ここでは創草期の教育活動について少し触れてみたいと思います。

学校が発足した当時、先ず決めねばならないことほ教育の目標でした。初代校長の福田先生ほ優しい方でしたが一面児童の躾についてはきびしい方でした。速かに学校の校風をつくり、立派な伝統を築き、将来の社会人として、日本人として新しい文化国家を建設していかなければならない理想の人間像はどのようなものでなければならないかを検討し、この目標に向って毎日の教育活動が推進されねばならないということでした。それには、一、明るい子（心身ともに健やかで皆と仲よくし協力する子）

二、努力する子（ものごとをよく考え、ねはり強く実践する子）
三、きまり正しい子（礼儀を正しく、物を大切にし、きまりを守る子）　の三項目でした。そして四十余名の先生方と八百名の児童とにより力強く着々と新しい学校づくりが始まったのでした。

新設校として、児童の融和を図り、協力的態度を培い楽しい学校社会をつくるには、特別教育活動の推進が最も急務であるとの見地から、開校以来全職員がこの特活の研究と実践に取り組んできました。各学年、各領域毎の具体目標を設定し、学級会活動、委員会活動、代表委員会、全校集会などの研究分担組織を作り、校内研究会、講師招へい、他校視察などを行い、四十年一月二十二日東部地区を対象とする研究発表会を実施しました。ささやかな発表会ではありましたが、児童の自発的、自主的、協力的、集団生活態度は目に見えて進歩し、市教委をはじめ参会の先生方の絶好評をいただきました。

続いて同四十年十一月二日全市を対象とした研究発表会を実施しました。全職員が特活の授業を行い、委員会活動、クラブ活動等を公開しました。たまたま福田校長は七月頃から病のため入院され、手術加療中であり、職員は供血してご快癒を祈りましたが遂に研究会に出席されることができませんでした。教頭は連日病院にお見舞してほ校長の指示を受け、全職員は主任を中心に自発的組織的に研究活動を展開しました。研究会には遠く他県からの先生方もあり、約二百余名にも及ぶ参会者の絶賛の中に進行し、最後に市教委の賛辞と講評で終了しました。

新設校として見事な研究と実績を発表し得たことは、全職員が病気中の校長を立てて結束し、研究に専念した結果であり、明るい校風の樹立と、児童の協力的社会生活態度の育成の上に、誠に尊い賜でありました。

若葉小学校の思い出

旧職員　美　作　　明（昭和 43・4ヘ～昭 51・3）

私が若葉小学校に転勤して来た昭和四十三年四月は、若葉校が創立後七、八年経過した頃でした。校庭のアカシャ、ポプラ、桜の若木からも、新設校らしい初々しさを感じることができました。運動場も広々としており、周囲には体育の固定施設がほどよく配置され、さらに、その西側には樹木園、そして東側には　「若葉富士」や「野外教室」と他校にない素晴しい学校環境が整っており、創立以来の職員やＰＴＡの方々の学校づくりの情熱をひしひしと感じさせられました。

在勤八年の間には、いろいろな思い出がありますが、体育の係をしていた関係から、運動の施設や環境についての思い出を二つ述べたいと思います。

一つは体育館の建設です。昭和四十四年起工し、四十五年の三月には落成。四十四年度の卒業式は初めてこの体育館で行われました。入学以来、行事の度に教室の仕切りを取りはらってきた子ども達にとっては、体育館の落成は大きな喜びでした。この体育館をいつまでも熊本市一番の美しい体育館にして残していこう。そして、それを若葉校の自慢の一つにしょうと子ども達と話し合い、掃除をがんばったり、使用規定を作り、児童、職員、ＰＴＡも含めたみんなで努力したことが思い出されます。確か、五十年の秋、体育館が同和教育研究大会の会場となり、訪れた参会者の人々が体育館の床の美しきに感嘆の声を上

げていたという話を聞いて、当時の子ども達と日頃の清掃の成果を喜び合ったものです。
もう一つは、運動場の芝生です。現在、市内五十八の小学校で、運動場が全面芝で覆われ、素足でも安全に運動できる環境にあるのは、若葉校だけではないでしょうか。
四十三年当時は、火山灰土のために、雨の時はぬかるみ、乾燥すると砂煙の舞い立つ状態でした。の運動場に最初に芝を植えたのは昭和四十三年夏、マットを出さなくても転げ回れる所をつくろうと、縦二十m、横三m程の広さに植えたものです。水やり、草とりを上級生を中心にがんばり、少しずつ面積を増やして、二百㎡になった昭和四十七年、熊本市の学校緑化対策によって、全面芝生になりました。全児童での草取り、ＰＴＡの奉仕活動による芝刈り、職員による施肥と、維持管理にみんなの力が結集され、若葉の名に相応しい芝生の運動場が生まれ育っていきました。私の若葉の思い出の大きな一こまです。

緑化運動について

現職員　永　松　允　積

一、　はじめに

本校の樹木園、けやき並木を眺める時、誰もがその美しきに目を見はり同時に樹木の配置の良さに感心する。
二十年前、あたかも今日の姿を見通したかのような先輩の洞察力に、畏敬の念をいだかずにはおれない。創立当時、学校と地域とが一丸となって環境つくりにまい進し、またその意志を受け継いだ後進の努力により現在の若葉小学校がある。その努力が今、実を結びつつある。
緑の環境づくりは、創立当初よりの本校の伝統づくりの一つであり、昭和三十九年、創立三年目にして早くも学校美化コンクールで優賞を受賞し、その後も数多くの入賞を重ねて現在に至っている。特にここ数年の受賞の基盤を築き上げたのは、全職員の緑化への取り組みとあわせて、故今村朗先生（昭和五十二年～五十三年度勤務）の努力によるところが大きい。先生の努力によって環境緑化実施調査書が完成し、本校緑化の取り組みの現状が文書資料としてまとめ上げられた。
最近の緑化コンクール入賞は以下の通りである。昭和五十三年度市長賞・五十四年度熊日賞・五十五年度全国入選・県知事賞・五十六年度県知事賞などである。

二、最近の緑化活動への取り組み

（一）　若葉まつり

本行事は美しい環境づくりをめざし、地域と一体となって緑の祭典を行うものである。もちろん児童に対しては、緑化への意識を高めさせるための機会でもある。本年度で第三回を迎え、六月七日（日曜）に実施した。第一部の「緑の集い」を体育館で行い、学校長・歴代校長の話など儀式的なものを実施し、第二部　「芝生で遊ぼう」は運動場芝生でリレーや親子綱引きを行い、芝生の感触をたのしんだ。昼の木かげ弁当は、樹木園やけやき並木などの涼しい緑陰の下で、親子そろっての楽しい昼食風景が見られた。第三部「おみこしワッショイ」は、学級手づくりのみこしがくり出し、まさに緑の祭典にふさわしいフィナーレとなった。この若葉まつりを通して、児童が緑をテーマとした作文、習字、絵な

どをかいたり、歌を歌ったり、また樹木名当てなどをすることによって、緑への関心を高めたことはもちろんであるが、まつりを通して学級のまとまりや楽しさ、連帯協力などのつながりが深められたこともまちがいない。

（二）　除　草　作　業

きれいな芝生を保つため、芝生内の除草作業ほ欠かせない。年間八～十時間を計上し、雨あがりの除草しやすい時を見はからって実施した。全校児童が運動場一面に広がり、雑草を一本一本丹念に抜き取っていく。取っても取っても後から雑草が伸びてくる。油断すれば雑草が広がっている。大きくなったオヒシバをドライバーで抜き取ろうとすれば、その後に穴ができる。そこで、ノコギリ状の歯のついた鎌形の道具を使って、根を地中で切り取っていく方法を児童が見い出した。

このように児童自らが芝生の除草を行い、その芝生ではだしになって遊び回り、運動するとき汗を流したことや、勤労の大切さや意味を理解することができると考える。除草作業は特設時間のみならず、若葉タイムのＶＳとしても自発的に進められている。

（三）　学　　級　　園

四～五月にかけての学級園はお花畑である。パンジー、チーリップなどが咲き乱れる中で教師を中心にして児童が集っているようすは、見る者の心を優しく暖かくさせずにはおかない。この学級園も、児童と教師による協同作業によって開花したものだ。前年からの土の掘り起こし、施肥、水やり、除草などの作業あっての開花であり、児童にとっては待ちに待った開花である。だから、花を踏んだり枝を折るなどの悲しい出来事は若葉小では開かない。学級園の広さにも恵まれ、夏には理科の学習に必要な植物の他にも教師の工夫によって種々の植物が植えられ、商店でしか見たことのない物が、自分達の学級園で育てられる事実に、目を見はる児童の姿を見受ける。

（四）　ＰＴＡの協力

芝生内の除草は、児童がせっせと心がけてやっているが、夏休みは、取り残しや抜き取れなかったものが広がり、繁茂する。そこで、毎年八月中下旬早朝、ＰＴＡの協力で除草作業が行われている。芝の管理維持には大人の多人数での作業が効果を上げる。プールサイドの美しい芝は水泳グラブの保護者の協力があり、卒業記念樹も一本ずつ数を増し学校の風格を高めている。

（四）　職員の取り組み

除草作業時間に職員を探すのに時間がかかる。立って指導している教師を見受けないからである。児童と一料に運動場にかがみ込み、一本一本たん念に手早く取っている。教師が先頭に立って働こうという心が、いつとはなしに教師間に広がっている。この職員の共通の心が若葉の緑を守り育てている。樹木園をはじめ、校内約七百本、百五十種の樹木の管理維持、芝の管理などは職員でなければできないことが多い。また、緑を教材化するための樹木園内見学指導、学級園指導、ガイドラベル作成指導なども行われている。

三、お　わ　リ　に

私達が求める緑化は造園師が設計し、庭師が手入れするような美的なものではない。かといって自然のままの荒れ放題の姿でもない。あくまでも、学びの園にふさわしく整備された環境でなければならない。

校舎の鉄筋化に伴い、本校敷地全体の利用計画を検討立案し、伝統をふまえた教育環境づくりを前進させねばならない。あわせて、その環境を教材化して、あらゆる教育に生かせるように工夫することこそが今後の課題である。

一日の生活の様子から

現職員　江　崎　文　洋　　（生活指導担当）

午前八時二十五分、年間通しての学校生活始業時刻である。十五分になると、『おはようございます。一日の始まりです。今日の一日は、あなたにとってはどんな一日でしょうか？　さあ、一日のくらしのめあてをもって朝の運動に、奉仕活動にがんばりましょう』と、放送委員の朝のやさしい言葉と音楽が流れ始める。この十五分までには登校し、一日のスタートをするよう呼びかけている。各教室とも七割程度の子ども達がすでに登校を終えているようである。登校後は寒そうにじっと教室に閉じこもっている子、運動場に飛び出て元気いっぱい走りまわったりボールやなわとびで遊ぶ子、いろいろである。なかでも、どんなに寒い時であろうと緑のカンを持って前日の放課後に無造作に散らかされている食べ物のかす、紙くず、タバコのすいがら等を拾ってまわる子、教室や廊下の朝のそうじを奉仕と考え、強制されずとも実行している姿は若葉小独得のものであろう。これらの子ども達の表情や朝のあいさつは実に生き生きとしている。

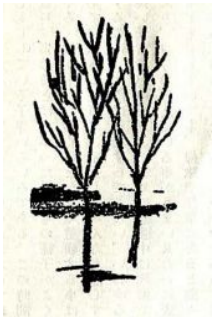
二十三分になり朝の音楽も終りに近づく頃に、おそかったかと走りこむ子どもの顔も生気いっぱいである。ところが、すでに二十五分過ぎているのに、一日のスタートというのに、暗い沈んだ表情と重い足どりで校門に入ってくる子どもも少なくないのである。現在は登校拒否の子どもが増加しつつあり、その治療も極めて困難といわれている。若葉小でもこの朝の登校の姿や、子どもの意識調査結果にあらわれている（勉強していることはほとんどわからない。友達とは争うことが多かったり友達がいなくて寂しい。学校生活はいつも楽しくないと答える子どもが少なくない）。現状を考えるとき、いろいろと考えさせられる一日のスタートの朝のようすである。

次に『昼のそうじが始まっています。若葉小全員で働く時間です。寒くなりましたが、窓を開けて時間いっぱい力いっぱいがんばりましょう』と、校内放送が流れる昼の全校一斉の掃除の様子である。ここでも朝の登校の時と同じような光景がみられる。掃除の仕方を心得て、実に整理整頓が上手でよく働く子。有り余ったエネルギーのコントロールができず所かまわず暴れまわる子。何をしてよいのかわからずぼんやりもじもじしている子等いろいろである。この時間になると教科学習の時とはちがった子どもの様子がよく現われてくる。勉強中は、働く事とか整理整頓する事はとても大切ですばらしい事だと主張し、みんなが感心する発言をするのに、実際は掃除すらできない、いわゆる一見頭の良い子も多いのである。反対に勉強中は理解できなかったり、自分の考えている事がうまい具合いに表現できずもじもじしていても、掃除や作業になると黙々と人のいやがる仕事もやりとげる子も多いのである。家庭での躾の様子の片りんがのぞける時でもあるような気がする。またこの時間になると、子ども達の先頭に立ってほうきを持ちぞうきんを持って共に働き、ろう下の光は心の光に通じるもの、掃除は心の掃除に通じるものとし指導される先生方の姿は若葉小独得のものであろう。

最後に、『みなさん下校の時間になりました。今日の一日はあなたにとってどんな一日だったでしょうか？　また明日の一日があなたにとってすばらしい一日になりますように、では安全に気をつけてさっさと帰りましょう。さようなら』

と、やさしい言葉と音楽が流れる午後四時三十分の下校がやってくる。この頃になると、各教室とも係りの仕事をがんばっている子どもや、運動場で元気いっぱい遊びまわるごく一部の子どもを除いては、ほとんど子ども達の姿は見られない。下校のひとときにもいろいろな様子がのぞける。　（今日はひま？　遊ぶ時間はある？）（ううん。遊べない。ソロバン。習字。塾……）　（じゃあ明日の予定は？）等大人顔負けの下校後のスケジュールと会話を耳にする。また上学年になり、午後の学習が長びくとさかんに時計を見て時間を気にし、勉強にも身が入らない子どもがいる。下校後の次の学習の予定時間に遅れる事を心配しているのである。一方ではテレビやマンガにたっぷり浸りきりの生活や、自転車を乗りまわしうす暗くなってもうろうろしたり、校庭で寂しそうに遊んでおり、遊ぶのがおもしろくて家に帰らないのとはちがう子どもの姿もみかける。話しかけてみると家に帰ってもつまらないからと言う。現在では小学生による家からの金銭の持ち出しや乱費、窃盗、無断外泊、家出等も問題化しているが、若葉小でも子どもの意識調査結果にあらわれている　（両親のケンカが多くていやだ。いつも酔っぱらっていていやだ。両親が話し相手になってくれず寂しい。家庭生活は楽しくない。と、答える子どもが少なくない）。現状からも心配が多い。

このすばらしい緑に囲まれた若葉小の子ども達の一日の様子を眺める時、今何が最も必要かよく考える事がある。（先生、家ではこんなに努力しています。躾をしています。あとはよろしく頼みますよ）　（お父さん、お母さん、学校ではこんなに全力出して教育しています。家でもよろしく）そしてそれをやさしく見守る若葉地域の姿なしでは、心も体も健康な子ども達は育たない事は明確な事だが、簡単な事ではない。しかし（おはよう。行ってきます。こんにちは。さようなら。ただいま。おやすみ）と毎日くり返される言葉と表情の中で、子どもが今何を考え、何を心配し何を求めているのか、あるいは満足し充実しているのか、親も教師も鋭く反応し感じ得る勉強と努力が必要であり、今日からでも実行できる事だというのもよく考える事の一つである。



校歌の制定

校歌は長くこの校区に住み、あるいは生まれてくる子ども達に歌いつがれるものです。そこで校区民にその趣旨を理解してもらい、学校に対する共通の愛情を持って欲しいという学校長の配慮で歌詞を校区から募集。集まった七編のうち、五町内の野田初枝氏の作品が採用されました。それを当時の在校生のお父さんだった熊大助教授の秋山正次先生が補作され、同じく熊大の助教授で、犬童球渓先生の孫にあたる梅沢信一先生に作曲を依頼して、三十八年三月四日に制定されました。

先生のページ

創立の頃をおもう

旧職員　大　坂　了　也

十周年記念誌に思い出を寄稿したのが、ついこの間のことのように思われるのに、早くも二十周年とか、月日の早さをしみじみ感じます。

私は創立当時、親学校の泉ケ丘小から横すべりした職員の一人でした。昭和三十六年の後半から泉ケ丘小の分教室としての若葉に、三年生の担任として勤めていましたから、三十七年四月の異動は形ばかりで、それこそ〝横すべりの居すわり〟といったかっこうでした。

初代校長の福田先生から、新設校の体育主任と環境主任という大切な役目を命ぜられ、若さと、地元意識（若葉五丁目居住）も手伝って大いにハッスルしました。

その当時は、学校長をはじめ全職員が「泉ケ丘に追い着き追い越せ」の気持ちで張り切っていましたので、若い私の強引な企画にも協力してもらえたものでしょう。第一回のＰＴＡ総会の時、「若葉のその名のとおり、緑がいっぱいの、石ころ一つない、公園のような運動場にしたい」と話した記憶があります。現在と違って、緑化等は大部分が地域や学校の独自の活動に任されていただけに、職員、児童、保護者の方々の苦労も多かったし、逆に、それなりのやり甲斐もあったように思います。

「学校のあゆみ」欄に当時の思い出を綴らせていただきましたが、運動場の塩処理、プール建設、樹木園、けやきの植樹等さまざまな思い出が胸中を去来しています。当時、共に汗を流し、今はもうりっぱな社会人パパやママになっている卒業生の皆さん。毎年夏休み二回も除草して下さったＰＴＡの方々、ほんとうに御苦労様でした。

皆様方のこの基礎づくりの努力が、若葉の伝統として二十年後の今まで引き継がれ、数々の環境賞となって、若葉の緑とともに輝いています。

このすばらしい学校環境を学校、校区の誇りとして、いつまでも守り育ててくださいます様皆様にお願いして筆を置きます。

若葉校周辺の今昔

旧職員　南蘇一

大東亜戦の最中、昭和十七、八年頃と記憶する。当時水前寺方面、託麻原の台地、健軍方面の畑地、原野に工場が建ち、従業員の住居、宿舎としての寮が並び、熊本市東部地区一帯は工場の町として発展の緒についた。

交通も水前寺から健軍終点まで市電が延び、バスが通い、それに工場への物資、原料、従業員の足として国鉄水前寺駅から京塚経由で鉄道が、今の自衛隊の前まで敷かれた。しかし、辛か不幸か折角の工場建設も、その製品を出すまでにほいたらず、昭和二十年八月の終戦となった。従業員や、関係のあった人々も、あちこちと散って、空襲で焼けた廃虚は、夏草の茂るがままに、夏の日は、強く照りつけていた。

その後、当時の外地、朝鮮、満州、台湾、その他の地方等から引き揚げの人々が、つぎからつぎと、この地へ住みつくようになってきたのである。そのため、四、五年の間に人口が急増し、健軍校は児童数も三千五百名位になり、職員も六十有余名、一学級の児童数

も六十名から七十名近くになって全く飽和状態であった。昭和三十年頃になると、衣・食・住もどうにかおちつき、人々の生活も明るくなって、教育のことも考えられるようになり、この地に泉ケ丘小学校が誕生し、健軍校から一部の児童が移って、新しい教育環境ができた。

これよりさき、出水中学校から分校として湖東中学ができ、やがて独立することになった。

年々と世の中もおちつき、教育環境も整備され、商店街も繁栄し、工場あとには、自衛隊、工場、学校、公的機関が建ち、発展の姿にある時、若葉校が分校として誕生し、やがて完全に独立したのが、二十年前である。

畑の中にポッンと学校だけが建ち、周辺には住居もわずかしかなかった。

初代、福田校長は、特に学校経営の最高の手腕の持主であった。若葉の名に恥じぬみどりの学校として、名実ともにすくすくのびるよう、ＰＴＡの方々、地域社会の皆さん、そして職員一丸となって、校地、校舎の環境づくり、教育内容の充実へと努力をおしまず、このようにして、今の若菜小学校となったのである。終戦の荒んだ世の中を思うとき、一しお感慨無量である。

私と若葉小

現職員　下　村　静　枝

八年前、私は若妻小の校門をはじめてくぐりました。こじんまりとして落ち着いた運動場が目に入り、その真ん中の芝の青さになつかしさを覚えました。私が小学生の時（台湾）の学校も芝と草がいっぱいで、トラックだけが土で黒々としていたからです。しばし、手入れされた芝とまわりの樹木にみとれました。

校長室へ入りますとお顔を知った歴代の校長先生の写真がかかげてあり、私が教職についたばかりで何ひとつわからない一新校時代にお世話になった阪本先生の写真もありました。その一新校で受け持った子ども達がもう立派な親と成長され、そのお子さんをまた私が受け持ち、家庭訪問の時びっくりしました。一人だけでなく、学校の廊下や会合などで「隣のクラスでした」と、お父さんやお母さんから私の娘時代の名前で呼ばれたりすると、嬉しくもあり恥ずかしくもあり身のひきしまる思いです。

私がきましたその頃ほ､若葉団地の信号のあたりから正門へ行く通学路は用水路でした。今は舗装されて山桃の木やつつじなどが植えてあるところです。

新校舎建築のため、いちはやく整理された中庭の桜の木。新一年生の入学式に丁度満開で見事な年もあり、ちらちらと舞い散り、案内する六年生や新入生の頭に散る年もありました。この桜の木が一番よく教室から見える五年生に、四月始業式のあと「今年一年間に自分はどんな花をさかせますか」の作文に「この桜の木のように、大地にしっかりと根を張って大空にむかい枝を四方八方に思いっきり伸ばし花をたくさんつけるようにがんばりたい」と書いた男の子がいました。桜の木が植木屋さんの手できってしまわれる時も子ども達は窓から食い入るようにみていました。今度林間学校の工作の時に、子ども達の胸にいつまでも残るように、ループタイやブローチを手作りさせようと計画をたて、今、岩崎先生がこの桜の木の枝をのこで一人分ずつの大きさにひまをみつけては、切っていらっし

ゃいます。
　また、この木造校舎を倒す前の日に全部移転できたかどうか教室を見に行くと、女の子や男の子が教室のまん中に正座して「黒板さんありがとうございました」そしてゆか板一枚一枚に「おせわになりました」と、何べんもお辞儀している姿がまぶたの裏に残っています。
　二十年間多くの子どもを育んだ教室の最後の時に巡り合ったこの子ども達と私の一生忘れ得ぬ思い出となると思います。

ふるさと若葉

現職員　本　田　恵　子

　校庭の芝生が朝つゆにぬれ、銀色にかがやく美しさ、中庭の桜のみごとな花ふぶきは、私の心をとらえ、安らぎを与えてくれます。
　若葉小のできたころ、理科室や樹木園を視察にきたことがあります。どの木も私の背よりやや高いくらいではなかったでしょうか。中には少しぐったりしたのもあって大丈夫かなと一人心配したものでした。でも今では、みごとな樹々に成長し、びっくりしています。立派な岩石園ができた年には、写真もとらせてもらいました。
　このように緑の深い学校に転勤できたらいいなあと思っていました。若葉には何か人を引きつけるものがあります。それが、終戦間もないころ、家を焼かれ住む所のない人々がこの地を求めて移り住むことになったのではないでしょうか。私もその中の一人だったのです。
　そのころ、今の商店街はでこぼこ道で馬の糞が落ちていることもありました。でも広々とした畑で春にはせりやのびるをつみ、初夏になると麦の穂をしっけいし、口の中でかみガムを作りました。麦刈りが終れば埴輪を見つけるのも楽しみの一つでした。この畑は今の一町内あたりだと思います。
　自然に親しみ、のどかな田園で育った私の郷里は若葉です。芝生や桜が昔をよびおこし大好きな若葉となっているのです。
　その自然が若葉美の緑として今でも残っていることを、大変うれしく思います。
　新校舎に生まれ変わっても、伝統を大事にして、ますます発展することをお祈り致します。

若葉小二十周年を迎えて

現職員　谷　田　敬一郎

　昨年四月、私が新任として本校へ赴任した時、本校はちょうど二十年目の木造校舎でした。それが、十一月には崩され、来年度には新校舎へ移るという、本校の歴史の中では大きな転機とも言うべき時期に、赴任して来たわけです。また、「教師は最初の三年間が勝負だ」とも言われますから、尚一層、教師として身につけねばならない事（それは限り無くあると思います）を、出来る限り多く学び、一日一日を大切に過ごしたいと思います。個人個人の能力には違いがあり、どんなに頑張っても出来ない事もありますが、それに失望することなく、その時その時を、自分の持つ力を最大限にふりしぼって、苦しみながら、

「もうこれ以上は出来ない」という所まで頑張る事が、今の私に一番必要な事だと思います。また、そうする事で、若葉小の名に恥じない教師になれるのだと思います。

こうした記念すべき時期に本校で教師生活のスタートがきれたからには、「教師としての土台をつくる所は、ここだ」と、肝に命じて、残された二年と数カ月を悔いなく、思う存分頑張りたいと思います。

二十周年に寄せて

現職員　　嶋　本　暢　子

昭和四十年六月、丁度私が上の子を身ごもり産前休暇に入っている時、竜南中学校より本校へ転勤になり、そのためか予定よりずっと早く出産しました。その子も今は高校一年生・・・。

産休もあけ、若葉校に出勤した学校は、第一校舎・第二校舎・第三校舎と理科室のみでした。職員室は六の三教室の隣で現在の資料室でした。その後学級も増えプレハブができるまで、理科室に校長室、職員室、保健室、事務室とつめこまれていました。狭いながらも楽しい職員室で、毎日笑いのたえない日々でした。

プレハブができ上がり移転しましたが、噂にたがわず夏は暑く冬ほ寒い室でした。夏はぬれタオルを頭に乗せたり、首に巻いたりして仕事をしました。また運動場は火山灰でほこりっぱく、児童・ＰＴＡで汗水を流して塩まきをしました。この苦労を共にした仲間のつながりは深く、別れて十数年の現在も毎年旅行等をして楽しんでいます。

管理棟ができ下の子をお腹にかかえて新しい事務室に移り、翌年四月画図小へ転勤そして六年、帰って来た若葉小は運動場には芝生が美しく広がり、校舎はピカピカに光り、その後の本校の皆さんの努力をしみじみ感じ、懐しいやら他の学校へ来たような変な気持ちでした。

今また、運動場一ぱいにプレハブが出来、裏の方にはブルドーザーの音がし、新しい若葉小学校の発展が約束されているような気がしている毎日です。私の人生の節目節目もこの若集小で迎えているようで、一生忘れる事のできない学校となりました。

児童の作品

お　正　月

一の一　おお田　えり子

きょうは、一月一日です。

あさ、おきて、わたしほ、おとうさんとおかあさんのところへいきました。　「おかあさん。」とよびました。

わたしは、おかあさんのかおをみてわらいました。そして、つぎも「おかあさん。」とよびました。

うれしくなって、また、わらいました。

それから、おかあさんにかみのけを日本がみに、ゆってもらいました。そして、きものをきました。

それから、みんなそろって「あけましておめでとうございます。」といって、おぞうにをたべました。

ぞうにの中には、こんぶとするめがほいっていました。

こんぶほ、よろこぶためです。

するめは、けんかをするめとおしえてもらいました。それから、払いちゃんとわたしはジュースをのみました。

おとうさんとおかあさんは、赤ざけでおいあいしました。

おてんきがよかったので、みんなで、おみやまいりにいきました。〝おばあちゃんがながいきするように、わたしほ、そろばんのしけんがとおるように〟おわがいしました。

きょうほかい

一の二　膏　原　み　ほ

きのう、にしきがおかこうえんに、きょうほかいで、いきました。学校をでてから、しようてんがいを、とおりました。まだどのおみせも、じゆんびちゅうでした。

しんごうをわたってから、じえいたいどうりにきました。たくさんの、かぞえきれないほどの木が、ずらりとならんでいました。

こうえんについてから、いっときあそびました。

いっときたってから、おべんとうになりました。

わたしは、中村さんと原田さんとで、おべんとうを、たべました。おやつをたべるとき、中村さんや原田さんにも、わけてあげました。おべんとうをたべてから、すなはで、おしろをつくりました。

はじめほ三人だったけど、あとから「かててちょうだい。」と、つぎつぎにきました◇

おしろに、トンネルをはろうとしたら、せんせいが、「あつまれえ。」といったので、ほられませんでした。

学校に、かえるとちゅうで、しんごうがありました。わたしが、わたろうとしたら、あかになって、わたれませんでした。あおになってから、わたりました。

学校についたときほ、あしが、がんがんしていたかったです。

ロ　ス

一の三　福　田　　仁

十二月三十日のおひるまえに、犬のロスが、しにました。つよしにいちゃんが、うまれるまえからいて、とてもいうことをきく犬でした。

おとうさんが、「もう、十八年ぐらいになる。」と、いいました。

ロスは、人間でいうと百三十さいぐらいで、まえ足とうしろ足はよたよたでした。耳もあんまりきこえなかったです。

よなかは、ずっと、おとうさんとおかあさんをよんでいたそうです。ぼくも、ちょっと「ワンワン」というのをききました。そして、おとうさんとおかあさんは、こうたいでロスを見にいきました。

ロスがしぬまえ、おかあさんとしんじにいちゃんが、ないていました。
おにいちゃんが、ロスのせなかをトントンとたたくとロスは、なくのをやめて、じっとしてダンボールの中でねていました。
しぬまで、しんじ兄いちゃんがないて、ついていました。
ひろとにいちゃんが小さいころ、おうだんほどうをわたろうとしたとき、オートバイがつっこんできたそうです。そのとき、ロスが、オートバイのおにいさんにとびかかって、とめさせて、ひろとにいちゃんをたすけました。ロスがいなかったら、ひろと兄いちゃんは、しんでいました。
ロスは、おにくやさんにかいものにいっていました。
ロスは、ぼくたちとあそぶのがすきでした。
ロスは、にわのうさぎのはこのよこに、うめてやりました。そのよる、はかのまえに、おせんこうをたててやりました。
十本ぐらいたてたあと、つよしにいちゃんたちも、おせんこうをたてにきました。きんじょのおばあちゃんもはなしをきいてないていました。
おとうさんが「また、どっかからかえってくる気がする。」といいました。

こうしゃさんさようなら

一の四　つかもとなつよ

きょうは、　こうしゃさんとさよならをしました。
わたしは、こくばんに「このきょうしつのことを、わすれません。」とかきました。
みんなでゆかにてをあてて、ゆかのはなしをききました。
ゆかは、あたたかく、わたしたちに、おはなしをいっぱいしてくれました。
みんなは、さいごのおわかれに、十ぶんそうじをしました。そして、こうしゃにさようならをして、プレハブにいきました。
わたしは、はやく、てっきんのこうしゃができるといいなあとおもいました。
こうしゃさん、どうもありがとう。

ひのくにランドにいって

二の一　　川さき　より子

十一月二十二日、かぞくみんなで、ひのくにランドにいきました。
のりものがたくさんあったので、どれにのろうか、まよってしまいました。
わたしは、「かんらん車にのりたいなあ。」と思ったけど、おかあさんが、「いちばん上にくると、人が小さくなるからこわいよ。」といいました。
でも、わたしは、かんらん車に、“のりたいなあ、のりたいなあ。”と、心の中で、さけびました。
もう一つ、いいのりものが、ありました。
それは、ジェットコースターです。
〃ジェットコースターは、一どものったことがないから、きっと、いいよといってくれるかもしれない〃と思いました。そして、わたしはおかあさんにいいました。

「ねえ、おかあさん、かんらん車がだめだのたら、ジェットコースターはいいでしょ。」といいました。
おかあさんは、びっくりしたかおでいいました。
「えっ、ジェットコースターにのりたいの。」
わたしが、　「うん、ジェットコースターに、のりたい、のりたい。」といいました。
おとうさんがいいました。
「ジェットコースターねえ、うん。」
おねえちゃんが、大声でいいました。
「えっ、ジェットコースター。」
わたしが、
「そうよ、ジェットコースタうよ。」といいました。
おとうさんが、
「よし、ジェットコースターにのるぞ。」
わたしが、すごい大声でいいました。
「わあい、やった、やった。」
そして、ジェットコ・ースターにのりました。
きかいをうごかすおじさんが、はっしゃするとき、
「はしっているときほ、手をはなさないでください。
では、いってらっしゃいませ。」といいました。
そして、はしりだしました。
さいしょは、ゆっくりで、どんどん早くなってきました。スピードの音が、ビューンと、すごい音が出て、のっている人が「キャアキャア。」といいました。
おねえちゃんは、はっしゃしてすこしたったとき、ぶるぶるふるえていました。
おかあさんは、おねえちゃんにつかまって、
「キャアー。」といっていました。
おとうさんは、ただ、こわそうにしているだけでした。
わたしも、おとうさんといっしょで、こわくしていただけでした。
ーばんこわいところがありました。そこは、左にたおれていたのに、きゅうに右にたおれるので、とてもこわくてたまりませんでした。とても、おもしろくて、またのってみたいなあと思いました。

先生のせなかは画用紙

二の二　大つか　ゆう子

きゅうしょくの時
四ばんのわたしのうしろに、先生がすわった。
うしろをふりむくと
先生のいすに
大きな画用紙が、すわっているみたい。
先生がみどりのふくをきていればみどりの画用紙。

白のふくをきていれば白の画用紙。
青のふくをきていれば青の画用紙。
先生がろうかをあるいている時ほ画用紙があるいているみたい。
せなかの画用紙にえのぐとグレハスで絵をかいてみたいな。

お　正　月

二の三　田　尻　かおり

きょうは、お正月です。

おとそをのみました。あまくて、とろりとしていて、
わたしほ、おかわりをしました。

お父さんが「今年も、元気でなかよくしようね。」といいました。それから、けんぐんじんじゃへ、はつもうでをしました。

おまいりをする人でにぎわっていました。

おみくじが、たくさん木にしはりつけてあって、ちょうど、白い花がさいているみたいです。

お昼すぎから、おじいさんの家へ行きました。おじいさんは九十四才です。おばあさんは八十六才です。二人でにこにこして、わたしたちをむかえてくれました。

おじいさんの顔には、あまりしわはありませんが、手にはあります。「元気でこれてよかったね。」といいました。おじさんやおばさん、それから、いとこたちで、みんなで二十人いました。

お母さんほ、だいどころで、ごちそう作りでおおいそがしです。わたしは、三才のさおりちゃんとあそんであげました。なわとびや、すなあそびをしました。ぜんぜんなかないであそんだので、わたしは、あんしんしました。あんまりあそんだので、おなかがぺこぺこになりました。

ゆうごほんが、とても、おいしかったです。

夜は、みんなとまりました。わたしは、うれしくて、ねむれませんでした。

げ　ん　こ　つ

三の一　　伊　礼　裕　二

先生の手がブーン　ポカッ
男の子は　あいててて
女の子は　エーンユーン
げんこつっていてえなあ。
「先生、しゅく題、わすれました。」
ポカッ
「先生、ノートと教科書、わすれました。」
「ばかもん。」
ポカッ
一回もげんこつたたいてもらってない人

かわいそうだなあ。
だって、げんこつのいたさ
わからないもん。

ともくんと子犬をみつけた

三の二　陳　田　あきら

　冬休みの中ごろ、東町の友だちの家に遊びに行きました。その人の名前ほ、ともひろと言います。
　あだなは、ともくんです。
　ともくんと、アパートの横の石山のところで遊んでいると、
　「ウーワオン、ワオワーオーガウ。」
　と、けんか声がしてきました。
　「ともくん、なんかきこえるけん行ってみよう。」と、言いながら、なきごえのするはうに行って見ました。すると、大きな犬が子犬をいじめていました。
　「かわいそかあ。とめようよ、ともくん。」
と言ったけど、ともくんは、
　「犬のケンカに人間が手をだしたらいかんとばい。」
と、言ってたすけようとしません。
　ぼくは、しようがないのでだまって見ていました。
　犬たちは、かみつきあったりしていました。
　しばらくすると、大きな犬がねころんで下になって、
子犬からやられていました。子犬は、大きい犬にまける だろうと思っていたので、
　「ようがんばるね。」
と思って、はらはらして見ていました。
　こんどは、大きな犬が、子犬にのっかって、やっつけようとしています。
　「ともくん、かわそくなかとね。」
といって、ぼくは、石をなげて、子犬を助けました。
　大きな犬は、すばやくにげて行きました。子犬は、ぼくにゆっくり、ゆっくりとよって来ました。子犬は、ぼくの前まで来て、たおれてしまいました。見てみると、体、全体が白だったけど、よごれていました。
　ぼくは、そっとだいて、ともくんの前におきました。
まだ、たおれたままです。だいじょうぶかなと、心配になりました。ともくんが、
　「かわいいね。これすて犬ね。」
と、言いました。
　ぼくは、
　「そうだろ、くびわがついてないもん。」
と、答えました。
　しばらくすると、雨がふってきました。
　「こりゃいかん。たかくんちに行こうよ。」

と、言って、川村たかしくんの家に行きました。
「しまった。犬わすれてきた。」
と言って、もどったら、犬はたおれたまんまで、ふるえていました。
「しまった。死ぬところだった。」
と言って、犬をいそいで、たかくんのうちにつれて行きました。
「たかくん、この犬、みとって。」
と言って、ともくんと古いぼろぎれを、そこらへんにさがしに行きました。
「ないね。しょうがないよ。」
と言って、ともくんとたかくんの家に、もどりました。
すると、
「なにしに行ったと。もうふならここにあるよ。」
と言って、もうふを持って来てくるんでいてくれてました。犬は、あったかそうに目をつぶっていました。
「よかったね。」
と言っていると、いつのまにか、空は晴れていました。
ともくんが、
「あきくん、この犬に名前をつけよう。」と言いました。たかくんが、
「白いから、はくという名前にしたら。」
と言いながら、犬をなでていました。
「それでまかよ。」
と、ぼくは言いました。ともくんほ、
「はくでもなんでもよかけん、それより小足をつくろうよ。」と、言いました。
石山の横に、小屋をつくってやりました。ざいりょうは、木の板、プラスチックの板などです。
なんとかできました。
ぼくは、すっかり元気になって、走ってまわったり、ころげまわったりしていました。
しばらくすると、近くのおばさんがゴミをすてに来ました。ゴミのふくろのそとに、ぼろの男の子のねまきがすててありました。
ともくんが、
「そうだ、あのねまきをきせてやろうよ。」
と言って、ねまきをきせてやりました。はくほ、少しいやがりました。おもしろいかっこうです。
夕方になりました。
はくに、
「あしたもくるからね。」
と言って、小屋に入れて帰りました。
夜ねるとき、〝はくは、どうしてるかな〟と思いました。
っぎの日は、みんなと一日、おにごっこやかけっこやサッカーをして遊びました。
もちろん、はくもいっしょです。
夕方になったので、また、はくを小屋に入れて帰りました。ともくんたちと、

「あしたもいるかなあ。」
と言いながら、帰りました。

つぎの日、はくはいませんでした。
みんなで、手わけしてさがしていると、小屋のうらがわで、中学生の人たちが石をなげつけていました。
ぼくたちは、
「やめてよ。これぼくたちの犬よ。なんばするとね。」
と言って、石をなげるのをやめさせて、見にいくと、はくは、おきあがろうとむりをして、死んでしまいました。
たかくんはないていました。
ともくんとぼくはいっしょに、
「犬ごろしのバカやろう。」
と、にげて行く中学生にむかって言いました。
ぼくたちは、しばらくなんにも言えないで、はくを見ていました。あんまりかわいそうなので、三人で、おはかをつくってあげました。

こわれてしまった校しゃ

三の三　村　上　正のり

ドン、ドン、ドカン。
ぼくたちの若葉小学校の校しゃが、こわされた。
生まれて、ちょうど、二十才になった今年、古くなったからこわされるのだ。そして、もうすぐ、新しい鉄きん校しゃができるのだ。
六年生のお兄ちゃんが、
「校しゃは、ずっと、こわれんがいいてからねえ。」
と言っていた。ぼくも、こわれないといいなあと思った。それは、三年生まで、とてもたのしく勉強して来た校しゃだからだ。そして、毎日、いっしょうけんめいおそうじした教室だったからだ。
かわいそうだなあと思った。
もう、みんな、こわされてしまった。
十一月ごろから、かいたい工事がはじまった。そばによって、こわれていくのを見てみた。星根がわらから、だんだん、なくなって行った。工事のおじさんたちは、かんたんに、くずしていくけど、ぼくはいやだった。
土にあながあいたように、何かたりなかった。
一年生の校しゃが、だんだん、なくなった。あれが人間なら、頭のぶぶんをこわしているところだ。へんな気持ちがした。上がなくなり、下がなくなった。大きなはしらや、かわらが、ゆっくりゆっくり、クレーン車で、地面に下ろされていった。
ぼくたち三年生の教室も、みんな、なくなってしまった。六年生の校しゃは、こわされなくていいなあ。
すっかり、つぶされてしまった。

すごく、かなしかった。
今、ぼくたちは、プレハブ校しゃで勉強している。音楽教室のまどから見ると、もう工事が、どんどんすすんでいる。おじさんたちが、大きなドリルみたいなもので電ちゅうのようなものをうめこんでいる。体育をしていても、高いドリルみたいなのが見える。
ぼくたちほ、社会の勉強で、今まで入っていた校しゃをたてている写真を見た。でも、もら！この間までの校しゃも、昔の校しゃはなくなってしまうのだと思う。
昔の校しゃがかわいそうだ。
でも、九月には、新しい鉄きん校しゃができるのだ。
りっぱにできると、昔の校しゃもよろこぶだろう。
まちどおしいなあ。早く九月になあれ。
そしたら、また新しい校しゃを、ピカピカになるようにそうじをするぞ。

お母さんのたん生日

四の一　　久保薗　義　博

一月十八日、この日はおなかがいたくて、学校を休んだ。
「あっ、今日ほ、お母さんのたん生白だった。しまった。プレゼントを決めていなかった。どうしよう。なににしようかな。」
ぼくは、あせった。
「そうだ、自転車がいい。」
いま使っているお母さんの自転車は、あちこちが、こわれてボロボロになっている。お母さんが買い物に行く時など、ガタンガタンと音が出る。片側のブレーキもこわれている。いつかは、ブレーキがききすぎて、ひっくりかえって、あちこちにあざを作った。何百も、
「いたい、いたい。」
と言ったこともあった。それでも、お母さんが、この自転車に乗っているのにはわけがあるのです。
それは、高校入学の時、お母さんのお母さんに買ってもらったものだからです。
〃今まで乗っていたなんて、よっぽど大事にしていたんだなあ〃
後から聞くと、
「二十年くらい乗っていたよ。」
と言ったので、びっくりした。
ぼくの自転車なんか、二年でもう、ガタガタになってしまっているのに。
ぼくは、乗り方があらいからすぐこわれるのかな。
おねえちゃんが学校から帰って来たので、相談してみた。おねえちゃんも、たん生日のことをわすれていた。
「お母さんのたん生日いわいに、自転車を買ってやろうよ。」
「うん、それがいいね。」
と、さん成してくれた。
お正月にもらったお年玉を、貯金していたので、二人で一万円ずつおろした。たりない分は、お父さんに相談して出してもらうことにした。

土曜日に買いに行くことにした。
いよいよ土曜日、お母さんには、ないしょでナフコに行った。いろいろ見ている内に、
「お母さん、たん生いわいに自転車を買ってあげるからおいで。」
と、売場の方へつれて行った。でも、お母さんほびっくりして、　「うそでしょう。」といって、本気にしてくれなかった。
それでも、ぼくとお姉ちゃんとお父さんの三人で買ってあげると言うと、「お金が高いから、いいよ、いいよ。」
と言って、ナフコでは買わなかった。
どうしても買ってあげると言って、今度は、健軍の自転車屋へ行った。お父さんとぼくとで、だいたい決めてお母さんをよんだ。お母さんも気にいったので、それに決めた。三万五千八百円のを、三万五千円にまけてもらった。ぱくが、家まで乗って帰って、家のまわりを乗りまわった。軽快事だから、軽くて乗りやすい。
お母さんも、
「軽くて、スイスイ走って楽だわ。」
と言って、とっても喜んでくれた。
でも、お母さんは、雨がふったり、くもったりすると自転車がぬれるとよごれるからと言って、げんかんにしまっている。
「手術をした後で、あまり元気がないから、自転車が軽くて助かるわ。」と、喜んでいる。
だから、ぼくたちは、自転車をプレゼントしてよかったと思った。
お母さんが喜んでくれたので、とってもうれしかった。

若葉小の成人式

四の二　酉　島　まち子

今年で、若葉小ほ二十周年をむかえました。
わたしたちでいう成人式です。
今、若葉小は、鉄きん校しゃにたてかわる工事が、始まりました。第一校しゃと第二校しゃは、とりこわされてしまいました。なんだか、さびしい気がします。　わたしたちは、鉄きん校しゃができあがるまで、プレハブ校しゃでくらします。今年の九月には、鉄きん校しゃができます。
「はやく、できたらいいなあ。」と思います。
この若葉小を、せんぱいたちは大切にそだててくれました。
若葉のしばふは、きれいなのでゆうめいです。
これは、ほこりがたってこまるので、市におねがいして、しばふをうえたのだそうです。
そのおかげで、毎年、緑化コンクールに入選しています。わたしたちは、このことをじまんに思います。そして、今、その先ぱいは、りっはな社会人になっています。
わたしたちも、先ぱいにまけないように、みんなで、がんばりたいと思います。

二十周年の若葉小

四の三　川　口　真　樹

やっと、二十年の若葉小。
なんだか、「おめでとう」と、言いたくなる。
じまんのしばふや、あおあおとしている緑の木。
やっぱり、若葉には緑が一番にあう。
春、さくらがさき、新しい一年が入学する。
夏、葉が、あおあおとしげり、セミのこえも聞える。
秋、しばふの上で、楽しい運動会。
冬、茶色のはっぱが、雪のようにふる。
こんな一年が、もう二十回も続いている。
私が若葉小に入学したのが、若葉小が十六さいの時。
それから、四年。
私は、今、四年生。
そして、もうすぐ五年生。
前は、木ぞうだった若葉小も、今度は鉄きん校しゃ。
でも、今は、プレハブ校しゃで勉強している。
少し運動場がせまくなったけど、鉄きん校しゃのため若葉小のためならいい。
私は、この若葉小には、いろいろな思い出がある。
アスレチックやてつりぼうでケガをしたけど、楽しく遊んだっけ。
鉄きん校しゃができても、緑だけはかわらないでほしい。
これからも、若菜小学校さん、よろしくおねがいします。

百八つのかね

五の一　　新　居　志保美

十二月三十日に、おばあちゃんの家に行きました。
百八つのかねをうちに来たのと、おばあちゃんは一人ぐらしでさびしいからです。
はじめは、いとこの家まで行きました。
「おばちゃーん。」
「あら、来たね。」
と言って、私と母をむかえてくれました。
まだ、おもちをついていなかったので、今日つくのです。三年前までほ、うすに、もち米を入れてついていました。ついていたのは、お父さんとおじちゃんと、おじいちゃんです。でも今は、おじいちゃんは死んでしまったし、おじちゃんは体を悪くして、お父さんは仕事でこれないのです。だから、母と私とおばちゃんと、いとことおばあちゃんで、機械のもちつききを使って、もちをつきました。
夜になって、仕事場から直接来た父は、母を乗せて家に帰ります。
「しほみ、いい子でしとんなっせよ。」

「知っとるよ。」
父と母に、ばあちゃんが、
「よい年を、むかえてください。」
と、ていねいにいいました。
私も、ばあちゃんのまねをして、
「よいお年を、おむかえしてくださいね。」
と、おもわずいってしまいました。
そして、母と父の車は見えなくなってしまいました。
きょうは三十一日です。
私は、朝から、きょうの夜のことを考えていました。
「はじめにおふろに入って、レコード大賞を見て、こう白歌合戦を見て、そばを食べて、いよいよかねつきだ」
テレビを見ながら、こたつの中で、ねこのようにして口でごちゃごちゃ言っていました。
私は、ばあちゃんと二人だったから、たいくつでたまりませんでした。
「ばあちゃん、しほみはたいくつか。」
ばあちゃんは、ただ、笑っているだけでした。
夜になって、いとこが来ました。
私は、一人ふえたので、ぺちゃくちゃしゃべりました。こう白歌合戦を見ている時、そば屋さんが来ました。「やった。」と、ふすまのむこうで言いました。
そばを食べてしまったら、五分ぐらい待って、近くの西覚寺へ、百八つのかねを打ちに行きました。
私は、うきうきして、
「はやく、ほやくー。」
といいながら、走って行きました。
門のところまで来たら、
「ゴーンー、ゴーンー。」
と聞えてきました。
お寺には、ふつうのたき火よりもっともっと大きい、たき火がありました。
菊池の小学生もかねを打ちに来ていました。
「つぎのばんよ。」
と言って、私といとこは、急いでかねを打つところまで、登って行きました。みんな寒いので、たき火の近くに寄って、待っていました。
かねが静まると、私たちが、両手で力いっぱい、　「ゴーンー。」
と打ちました。かねは、デコボコで、なんこあるのか数えきれないほどでした。
二回目は、一回目よりもっとひびいて、こまくが破れそうです。
三回目ほ、もっともっと遠くまでひびきました。
「いま、熊本のお母さんたちは、何をしているだろう。」と、考えました。
三回打って、次の人にかわり、おじいちゃんのお骨を納めているところに行って、
「あけましておめでとうございます。今年もよい年でありますように。」
と、線こうをあげて、まいって来ました。

そして、菊池のけさおの家にむかいました。
私たちが行くその道は、あまりにもまっ暗で、いつゆうれいやおばけが出るだろうなど考えながら、通って行きました。
去年ほ、姉もいっしょで、二人ともおく病だったので暗い歌でなく、楽しい歌をうたいながら、いとこの家に行ったのですが、今年は三人なので、心細いけど、いとこと去年のように、歌って帰りました。
いとこの家に帰って、菊池神社に、いとこと行きました。さっき来た道をまた通ったので、こわかったです。
神社について、おみくじをひいたら「吉」だったので少しは安心しました。でも、一ついやだったのが、二年連続「大吉」だったのに、今年になったら「吉」です。
なんか、いやーなことがおこりそうでした。
帰るとき、鳥居に石を投げたのですが、のらなかったので、
「もうー、すかーん。」
と、いやな気持ちになりました。
帰っているとちゅうに、いやな感じのお兄さんたちがぞろぞろやってきたのです。
「ワァオー。」
と言って、ずうっとむこうまで、走って行きました。
「こわかったねェ。」
と、私は、声をハァハァいきを出しながら言いました。
「だいじょうぶよ。」
と、いとこは言ったけど、いっしょに後を見ながら走ったのです。
家に帰りつくと、テレビを見ようと思ったのですが、
「もう、だめ、だめだ。」
と、こたつでよこになってしまって、目はほとんどあいていません。
「しいちゃん、ふとんに入ってねなっせ。」
と、おばちゃんが言いました。
私は、ふらふらしながら、ふとんに入りました。横では、おばあちゃんがねています。
私は、ぐっすりねました。
つかれて、初ゆめも、みませんでした。

岩戸観音ハイキング

五の二　木　村　理　奈

金峰山に行って、二泊三日をすごしたなかで、今すぐにバツと思い出せるほどいんしょうに残っているのが、岩戸観音ハイキングのことです。
このハイキングで、いちばんたくさんの思い出を作ったのは、私たちの四班だと思います。
長い長い待ち時間が終わり、やっと出発。
元気よく玄関をとび出し、いそいでさか道をのぼって行きました。何百メートルも行かないうちに、黄色いタクシーとすれちがいました。そして、うしろを振りむいて見ると、

タクシーがこっちへ向かって、バックして来ました。なかから久保さんがおりて来ました。久保さんの班は、もうさきに行ってしまっていたので、私たちと いっしょに行くことになりました。これで九人になってまた、少し歩いて行きました。

ナップサックをしょった、少し太ったおじいさんがいました。

「どこへ行くとかい。」

と、聞かれたので、

「岩戸観音です。」

と答えると、近道をおしえてくださいました。

でも、私たちは、おことわりしてふつうの道を行きました。五分から十分ぐらい歩いたと思います。その時また、あのおじいさんに会いました。

「さようなら。ありがとうございました。さようなら。」

と言って、おじいさんと別れました。

それから、ずいぶん歩いて行くと、階だんの前に先生がいて、写真をとってもらいました。その後、コンクリートのさかを、ずっとかけて下りました。下りてしまってから、道にまよってしまい、みんなで、つみのなすりあいという感じでした。

それから、ジープの通れる道はばということだけをたよりに、道をさがし続けました。

やっと、本当の道に行ったら、一班の人たちに会いました。私たちと道のことを話して行く方が分かると、一班は走って行ってしまいました。

「ずるーい。」

「きたにぁー。」

などという言葉が、みんなのロから、次々に出て来ました。それから、歩きながら、どうしてまよったか、反省しました。

私たちほドベです。

先生たちといっしょに、十二人でゴールを目ざしました。さいしょは、何回か前の班においつきそうになった私達なのに、とてもみじめでした。

やっとついた。

きつくはないのですが、とても気づかれしていました。

おべんとうを食べ終わると、今度は、とても急で、しもがはって、つるつるで登りにくい山道をあせをかいて登って行きました。

次ほ下り道。

横ばらがいたいのをがまんして少し走りました。

自然の家についたら、へばってしまいました。

なんだか、とってもねたいという感じでした。

昭和五十六年度
青少年赤十字活動の様子

六の一　宮　崎　清　美

一　呼びかけ

みなさん、こんにちは。

今年も終わりに近づきましたね。
みなさんは、今年あった出来事の中でどんなことが心に残っているでしょうか。
私は、北海道でおこった夕張炭鉱事故が心に残り、ここに、募金活動、千羽づるを作り送るよう計画しました。
また去年から国際障害者年であるし、去年、年賀状を体の不自由な人へ送ったところ大変喜こばれましたので今年も去年と同じよう、年賀状を作り送るよう計画しました。
まずほ夕張炭鉱の事故ですが、みなさん、新聞やニュースなどで知っていると思いますが、この事故で百人近くの人々が亡くなっています。
その上、まだ生きうめになっているお父さんたちの顔も見ていない家族の人たちもいるのです。
みなさんどうでしょう。
もし、自分のお父さんがこのようなことになったらきっとつらく悲しいと思います。
そんな時、はげましや、なぐさめのためのお金や、心のこもった千羽づるなど送られてきたらなぐさめられると思います。
かわいそうと思っていたのでは、相手には伝わりません。
かわいそう、何かしてあげたいと思うのならば、実行しなければなりません。
ですから、自分のおこずかいから十円でおかしをかう前に、ふと思い出してみて下さい。
もしこのお金で夕張炭鉱の家族の人たちに、少しでも役に立つなら、と。ですから、今日のおこずかいの中の一円でもいいです。
何かしてあげたいと思うなら、活動に参加してみてはどうでしょう。
また、募金活動といっしょに、千羽づるも送ります。
これは、亡くなった人のれいをなぐさめ、また二度とこんな事故がおこらないよう、また家族の人たちのこれからの幸せを願い、送りたいと思います。
ですから募金ほいやだというのなら、千羽づる作りの方に参加してみてはどうでしょう。
ところで今年は国際障害者年ですが、今年も去年につづいて年賀状を作り、体の不自由な人のいる学校の愛育学園、玉きな荘、黒石原養護学校、日赤病院の方へ送りたいと思います。
あちらの学校でも「お返事をまっている」とメッセージを送ってくれておりますので、なるだけ多くの人に書いてもらえたらと思います。
そして、家の人にもよびかけてみてはどうでしょうか。
活動として三つの活動をするのですが、期日は、十二月一日から十二月十二日まで。場所は、募金活動が、正門、東門、南門の三つにわかれて、四日から七日まで行ないます。
千羽づる作り、年賀状作りは、材料を資料室におき、三日から五日まで行ないます。
できるだけ、やりやすいよう努力しますのでみなさんもご協力お願いします。

二　報　告　文

私たちＪＲＣリーダーで募金活動、年賀状作り、千羽づる作りを実行しましたところ、みなさんのご協力でたくさんの募金、年賀状、千羽づるが集まりました。
それで、集まったものを十二月十五日に、日赤の県支部へ持って行きました。
募金ほ、一円募金から二万だして全部で七万二千八百九十円集まりました。

また年賀状の方は、はご板の絵や、犬の絵などにし上げ、千羽づるの方も、五十羽ずつに糸をつなげ、千羽つなげました。

そして募金の方は熊本の日赤から北海道の日赤を通じ、夕張炭鉱へ送られ、そこでお父さんたちを亡くした子供さんらの学用品などに使われることになりました。

また千羽づるは、これも日赤を通じ、夕張炭鉱へ送られます。

年賀状は、お正月にはどの学校でも見られるよう、すぐ送ってくださるそうです。

また日赤病院の方へは、近くだったので、わたしが行きました。

この時、日赤病院の部長さんにお会いし、この年賀状の説明と、はっていただけるか聞き、はってもらえるとのことで、ろう下のけい示板にはってもらうことになりました。そして部長さんほ「年賀状だけでなく、絵などもどんどん送ってほしい」といわれました。

その後、日赤病院の中を回りました。

病院の中では車イスにのっている人を何人も見かけました。

また、相談室というのもあって、そこで、例えば「家にはだれもいないのでこまる」「入院したいがお金がない」などいろいろな、なやみを持っている方々の気持ちを考え何かいい方法はないか考えてくれる場所もありましたし、二階には、子供たちだけの病室があり、そこで日曜や休みの日など、高校生、大学生の方々がだれからもたのまれず、子供たちの遊び相手や勉強を教えてくださるようなことも説明していただきました。

このように案内していただき、帰る時、日赤病院の先生方はおいそがしい中、わざわざ三階から一階まで歩いて見送りにきていただきました。

また松井先生は日赤病院までついてきてくだきり、最後まで見送ってくださいました。

私たちを大人としてあつかってもらったことに対し、もっとしっかりした考えを持たなければいけないと感じました。

そして車が出発した時、松井先生は近くにおられた車イスの方に道を教えられ、車イスではちょっと、とおりにくい所があるのに気が付き、途中までいっしょについていかれました。

ここで私ほ日ごろＶ・Ｓといっているけどそうじや草とりだけがＶ・Ｓではなく、こういうこともＶ・Ｓの一 つだと教えられました。

松井先生も、支部の方々も日赤病院の方々も、大変お喜びなさってみなさんによろしくとのことでした。

この活動をおえて私は始めは小さな考えだったのがみんながこの考えに賛成し、参加してくれることにより、どんどん活動が大きくなっていったことで何か大切なことを学んだと思います。

小さな考えを大きく広げてくれたみなさん、どうもご協力ありがとうございました。

三　活動の感想

六の一大　坪　直　美

「副会長として、宮崎たちを手伝ってみないか。」と十一月も終わりに近づいたある日、江崎先生に言われました。

そのころ宮崎さんたち若葉小青少年赤十字リーダーは、年末の活動の計画で、いそがし

そうでした。
　ふつうの人は赤十字の活動などを手伝ってみないかと言われたら、めんどくさがってたぶんことわるかどうかすると思うけど、私はちがいました。
　めんどうな気持ちでもいやな気持ちでもなく、とてもうれしい気持ちでした。
　どうしてかというと、五年のころから赤十字の活動とか、ボランティアというものに参加してみたいと思っていたからでした。
　だからすぐに「やってみます。」という返事をしました。
　その時、副会長になって得したなあと思いました。でも、うれしい反面、出来るだろうかという不安もあったような気がします。
　初めて、募金活動、年賀状作り、千羽づる作りの活動をするせいか、いろいろ考えました。
　募金活動でほ、卒業した中学生、近くにたばこを買いに来た大人の人が、そのおつりを入れて下さったことにすごくかんげきしました。
　それは、私たちの夕張炭こうの事故で亡くなった人の家族に少しでも役にたつようにという気持ち、あるいは考えが、広まったからでした。
　また、この募金活動で五万二千八百九十円ものお金が集まったことも、とてもうれしい気持ちでした。
　これだけのお金が集まったとき、朝のとても寒いときにただ、「おはよう。」だけ言ってつったっていたいやな気持ちもふっとび、みんなの協力というのはすごいなあと思いました。
　年賀状作りの活動では、相手に対して失礼な事がかいてある年賀状があったので、とても残念でした。
　でも、もしかしたら低学年とかはどんな事が、相手に対して失礼なのかがわからなかったかもしれないとも思いました。
　また、数枚の年賀状を出す相手の身になって読んでみると、本当にはげまされたような感じがして、とてもうれしかったけど、本当の相手の人がこの年賀状を読んではげまされ勇気付けられて、がんばってもらえるだろうかとも心配になりました。
　千羽づる作りの活動でも、年賀状と同じように、まちがっておってあったり、雑におってあったりしたのがあったのがとても残念でした。
　でも、やはり年賀状と同じように、ていねいにおったつもりでも、もしかしたらまちがっておっていたのかもしれないと思いました。
　そして、自分が実行する側に実際なって考えると、去年なにげなく募金箱があるから募金したり、年賀状があるから年賀状をかいたりしたことが、なんだかくやまれてきました。
　この活動が終わった今、とにかくほっとしています。
　でも、初めて若葉小青少年赤十字の一人、また、副会長として、募金活動、年賀状作り、千羽づる作りの活動にかけたり、一つの事を計画し実行するためには、気軽な気持ちでは重く、しんけんさ、きびしさが必要だということが勉強になりました。
　また、つる作りなど、自分ではていねいにおったつもりでも、まちがっておっていたりする人もいるので、このような活動は、複雑で難しいと感じました。
　このほかにも、自分が気付かないところで大切なことを学んだと思います。

そして、またどこかでこのような活動をすることがあったら、この活動で自分に教えられたことをいかしていきたいと思います。

卒業まであと四十八日

六の二　島　崎　啓　子

あと、一カ月たらずで、卒業だといってもあまり今はピンとこない。

今日もいつもの授業とかわらないし、休み時間もいつもと同じ、卒業の話題など、友達と話していても一つも出てこないからだ。

けれども、サイン帳など、回している人がたくさんいる。

みんなは、卒業という言葉を、どういうふうに受け止めているだろうか。

私は、卒業したら、中学生になり、また、組がばらばらになってしまうがほかの学校の人とも友達になりたいと考えている。

三学期は、大事なまとめの時期である。ということは知っているが、三学期のまとめと卒業という言葉が、頭の中で、からまってなかなかほどけない糸のようになっている。

四十八日という日々をどのように、すごしていけばいいのかよくわからない。

ふつうのようにすればいいのだろうか。

三学期も、一学期や二学期と同じようにたくさん、いろいろな行事や、集会がある。

たとえば、今年ほ、新しく節分集会がある。

どんどや集会は、残念ながら、場所がせまいためないことになった。

勉強の方も、しっかりがんばらなくてはいけないと思う。

六年のまとめを、ちゃんとしていないと、中学生になってから困るのは、自分だということ。

三学期になってからもっともっと一学期や二学期よりもがんばれば良くなるということも心得ている。

だから、卒業を前にして、「日一日を慎重にすごさなければならない。

国語の勉強で習ったように　「責任」　ということと、「もう一度考える」ということをいつも頭に入れておいて、何事も、実行する前にこの二つのことを思い出して、実行に移そうと思う。

たった四十八日間を、一日も、傷つけないようにするために、自分が、今することは本当に正しいことかと自分で判断することが大事だと私は思う。

間違ったことをしていて「こんな事ぐらい、いいや」と思っていても、それは、他の人にも迷惑をかけることになるし、自分にも、四十八日という大切な、日を傷つけてしまうことになる。

こんな事ぐらいは、と思うところから間違いが起ると思えう。

大切な大切な毎日を、気を付けて、正しいことか、間違っているかを自分で判断しなければいけない。

勉強の方も、いろんな行事や集会の方も、頑張ろうと思う。

それから、もっと頑張らなくてはならないのは、Ｖ・Ｓ、奉仕だ。

私は、いつも、Ｖ・Ｓの時間は、皆頑張っているのに何も仕事をしないでいる。

何かすることはないかと、やり甲斐のある仕事を探すのだが運動場をただうろうろするばかりで、そこら辺にある小枝をひろうだけだ。

さぼるというのではけっしてないのだが・・・・・。

それで、いつも先生に注意される。

注意されるのはあたり前だと思う。

だから今日から頑張ろうと思う。

Ｖ・Ｓは、Ｖ・Ｓの時間だけにするのではなくて、いつでもどこでもできる。

たとえば、授業始まりのチャイムがなって、他の人が遊んでいたボールをそのままにして教室へ走っていった。自分はその置き去りにされたボールをかごの中にきちんと置いてから、教室へ入るという習慣を身に付けたいし、自分が手洗いにきたときに、隣の水道が、ちゃんと閉めてなくて、ボクボタと水が、したたっていたら、きちんと自分が止める。

というようにしようと考えている。

そのためには、まず気付くということが大事だ。

たとえば、道を歩いていて、紙くずが、捨ててあったらそれにまず気付くこと、気付いたら、それをどうするかと考えること、ちり箱に捨てると考えたら、それを実行してちり箱に捨てなければならない。

気付き、考え、行動ということの大切さを学んできたのだから実行しなくては。

卒業まで、もうわずか。

勉強や、いろんな行事、集会にしても、Ｖ・Ｓ・奉仕にしてもいろんな面から見て、判断し、一生懸命・全力っくしてやろうと思う。

悔いの残らないよう竺カ月とほんのわずかじっくり考えて行動しなければならない。

だんだん忙しくなってくるだろラが、小学校という一つの山を越えるのだ。

自分の実力を発揮するのも、今しかないという覚悟でやり通したい。

十年後の若葉小学校

六の三　川　口　亜　樹

緑のとても美しい若葉小。

十年後はどのようになっているだろう。

十年後の若葉小には、今の二年生もいなくて、私たちが知らない子がいる。
その子たちもきっと、夏は、はだしで、運動場をかけまわっているだろう。
今はプレハブ校舎がたっていて、思うように遊べない。でも十年後は、運動場も今まで以上にひろくなって いるだろう。

私たちの教室の前の木は、まだ残っているかなあ。

残っているといいな。

私たちのいる教室は、あるかどうかわからないけど、最後まで、きれいにみがいてやろうと思う。

私が二十二歳のころ、若葉小は、三十周年となる。三十周年は、二十周年よりもっといろいろな行事などがあるだろう。

今年プレハブがあるのでできなかった、どんどや集会。今年で最後なのにやりたかった

な。
そのころまで、兄弟学級は続いているかなあ。
もとはといえば、この兄弟学級は、今の六年が始めたものです。

だから、いっそう残っていてもらいたいのです。
私は、私が他の学校に行っていたらどんな子になっていたのだろうかと思います。
この若葉小で学んで本当によかったと思います。
私にとって大事な若葉小です。
十年後も緑の美しい学校であってもらいたいです。

雨宮神社について

四の一　　野　仲　敏　勝

ぼくは、雨宮神社について調べることにしました。
その動機ほ、よくうちのおばあちゃんが、雨宮神社のことを話してくれるからです。それで、もっと知りたいと思って調べました。
その雨宮神社は、若葉六丁目にあります。
作った人は、島崎半右之門という人で、おはかも、雨宮神社の近くにあります。その人が、なぜ作ったかというと、島崎半右之門が、ちょうせん出兵の加藤清正について、船どう頭として行きました。その帰りの船に、木がついて来ました。押しもどしても、押しもどしてもついて来ました。
「この木には、なにかがある。」と、思い、その木にご神体をきざみ、神社をつくりました。
行事は、今も昔も六月に宮ごもりがあります。今のすもうほ、十月三日にありますが、昔は九月三日にあっていました。
お宮について、主なことは、次のようなことです。まず、お宮は、三百年ほど前に作られたもので、やねを、三十年ほど前に、わらぶきからあかがねに、ふきかえてあります。
雨宮という名には、実ほ意味があります。
それは、昔、この辺りは農家が多かったので、作物が実るように、雨がふることをいのって、雨宮と名を付けました。
今、神でんに「雨宮」と書いてある木には、昔、「うき木の大明神様」と書いてあったと言うことです。
おばあちゃんが若いころ、おまいりする時は、「なむうき木の大明神様」と言って、おまいりしたそうです。
雨宮神社を調べるために、この辺りを世話した人などに開きに行って、大変ためになりました。
雨宮神社を調べてよかったと思います。それは、雨宮神社の前を通る時、以前は、何も思わなかったけれど、今は、「こんな小さな神社でも、いろいろな歴史があるのだな。」と考えながら通ります。
これからも、いろいろな歴史を調べてみたいと思います。

若葉の木は登りやすい

五の一　　星　乃　明　彦

ぼくが木登りをしたいなあと思うようになったのは、たしか、幼稚園のときです。

それは、市の小学二年生の文集を読んでからです。

兄が、その文集にのり、その内容が、友達と木に登りきれいな夕日をみたときのことを、詩に書いていたからです。それを読んで、

「うらやましいな。ぼくも、きれいな夕日、みたいな。」と、考えました。

そして、何カ月かたって、小学校に入学しました。

運動場で遊ぼうと外に出ると、登りやすそうな木がいっぱいありました。よく見てみると、上級生の人たちがところどころで木に登っています。ぼくも登ろうと思い、少し登ってみました。ところが、おりきれませんでした。

三年になって登ってみると、あれ、こんなに登りやすいのかと、思いました。

若葉の木が登りやすいのは、枝が太いからです。でも、太いからといっても、はじめから黄色い線までは登れませんでした。が、一回勇気を出して、おちてもいいと思って、登ってみました。

「登ってみれば、意外とかんたんだなあ。」と思いました。それまでは、木登りはきらいだったぼくも、いまでは、大好きというほどになりました。

むくの木に登るときは、枝が少ないので、木にはうように登れば、上の方まで登れます。

せんだんは、とても枝が太いので、今まで登った木の中では、一番登りやすい木です。でも、おりるとき、枝と枝との間が長いので、落ちそうな気がします。

それから、たいさんぼくにも登りました。でも、木についている粒みたいなものが、目に入るので、このごろはあまり登りません。

そして、ポプラにも登りました。でも、ずっしりとした木に、細い枝がついているので、上にいこうとしても枝がすぐポキッと折れるので、登れません。

よしのざくらという木にも登りました。よしのざくらは、幹がくねくね曲がっていて、登るのには好つごうです。でも、枝につかまると、バキッと折れたことがあったので、このごろは登る気にはなれません。

今、登る若葉の木は、枝が太くて、折れにくいのがほとんどなので、とても登りやすいなあと思います。

でも、登りにくい木もあります。

「この木って、こんなに登りにくかったのかなあ。」と、思うときがあります。だから、今度から、どういう登り方をすれば登れるかと考えて登ろうと思います。また、登れても、おりるときがあぶなっかしいので、もっと練習しようと思います。

もっと、木登りのできる、黄色の線のついた木を、ふやしてもらいたいと思います。

「次は、どんな木に登ろうかな。」

と、考えています。

卒業生から思い出便り

思い出を運動場に残して

梅　田　裕　司（東京在住）（第二回・三十九年卒）

創立二十周年おめでとうございます。

アルバムを引き出し、二十年前を思い返すにつれ、懐しきがこみあげてきます。

私が泉ケ丘小学校で五年生をむかえようとしていた春、それまで分校であった若葉小学校が独立し、編入しました。当時、私達五年生ほ二クラスしかなく、全校を通して一番少人数だったように記憶しています。

そして、もう一つ印象的だったのは、運動場の広さです。まだ、体育館もなく、ぼく達は一年中そこで遊んでいました。放課後はもちろん日曜日も夏休みも……。

目を閉じると、あの頃の元気な友達の姿がいっぱいに広がってきます。

そう言えばあの当時、冬になると校長先生のかけ声で全校みんなのなわ飛び大会がありました。一年生も六年生も、そして先生方も一緒になってなわ飛びをしました。

いまでも続いているのでしょうか。

私の思い出のほとんどが、あの運動場につまっています。今でも、そこを〝コンコン〟とたたくと、あの頃の私達の喚声が聞こえてきそうな気がします。

そして、私が卒業した後、その思い出の上を私の弟が遊んでいました。

兄弟で学んだあの木造校舎。巣立っていったあの運動場…。そして先生方…。

私の心は、今またあの頃の若葉小に遊びに行ったまま帰って来そうにありません。

新しく生まれ変わる我が母校に心より声援を送りたいと思います。

キラキラと輝いた新鮮な日々

橋　口　明　美（旧姓島崎）　（第六回、四十三年卒）

若葉小学校の誕生と共に入学した私は、今年が母校の創立二十周年だと聞き、改めて時の早さを感じています。

若葉小学校での最初の思い出は、入学式の後に上級生を迎えるという印象的なスタートをしたことでした。

新しい校舎、新しい運動場、新しい友達。でもそれは現在の小学生達が羨しがることばかりではありませんでした。どちらかというと不便なことの方が多かったような気がします。それにもかかわらず、毎日の学校生活はキラキラと輝いたような新鮮な日々でした。

先生方、保護者の方々の努力により、毎年毎年設備も充実してきました。運動場の遊戯施設が一つずつ増えていき、理科室ができ、プールができ……あの時の喜びは今でも忘れることのできない記憶となっています。

先生方、お父さんお母さん、そして自分達で努力して得た物だから大切にしなければ。そんな思いがみんなの心にあったように思います。

あの時の感動を現在の小学生にも理解してもらえればと願っています。

そして、創立二十周年を機に若葉小学校が、より一層生き生きとした学校になりますように祈っております。

思い出

宮　永　　貢　　（第六回・四十三年卒）

若葉小学校での六年間ほ、いろいろな思い出が多い。

我々の小学生時代は、今とちがって遊ぶ道具が少なかったように思える。私は勉強好きではない。いつも遊びの方に傾いていました。

当時はスポーツ、それが遊びで、サッカー、ドッジボール、ソフトボールが主流でした。

身体が弱かった私は、水泳を始めることにしました。

一年生の時にはプールがなく、秋津小学校に水泳をしに通っていました。そして、現在のプールで二年生の時に泳ぎ始めたように思います。

当時、クラブは四年生からでした。

その時の担当の先生が大坂先生で、私が水泳を好きになった時でもあります。五年生になって、担任である渡辺千代松先生が水泳クラブの担当になられた。そして、東部スイミングクラブが結成され、各関係者の方々のおかげで、優秀な選手が育ったのを私はおぼえています。

その頃のトレーニングは、私にとっては大変ハードだったと思います。しかし、多くの仲間と和気あいあいに楽しくクラブ活動を送れたことが一番の宝だと思います。

先生も朝早くからのトレーニング、そして夏休みの夏季講習で大変でした。その時に学んだスポーツ精神、それは〝誠実・自律・自学〟の精神であり、其の人間を造る糧であると信じます。現代社会では、利益の追求のためか、あまりにも問題が多い。そして、人間を軽視する傾向があるようです。こういった時代だからこそ、人間らしい人間であり、この精神をもって生かして行きたいと思います。

今、我若葉小学校に二世が入学している人もいます。

次の世代の子ども達にも、この若葉小学校のすばらしさを知ってもらいたいと心から思います。

思い出多い若葉のなかで

島　田　成　子　　（第七回・四十四年卒）

〝大阿蘇の朝日さす原　学び舎ほ輝く緑
大鳥のはばたくように　胸を張り希望にもえる
ああ　明るい若棄小学校〟

中学校、高校の時の校歌にくらべて、不思議とスラスラ思い出されるのがこの若葉の校歌です。それだけ、小学校時代というものが今の自分に大きなウエイトを占めているのかもしれません。

この歌と共に、若葉の校舎、ポプラ並木、樹木園等今幼い日にかけまわった時のグランドの土のにおいが蘇って来るようです。あの頃は今と違って、毎日の生活が〝遊び〟を主としており、その中心となる人が全ての面で主導権を握っていたものでした。

毎日「もう遅いので、家に帰りましょう。」という放送が流れるまで、グランドで走りまわって、ちょっとやそっとの怪我ほ日常茶飯事。まるでそれが勲章のようなものでした。

授業も、勉強を強要したものではなく楽しいひとときだったような気がします。特に私

にとって思い出深い小学校二年の時の山中幸子先生は、毎日たくさんの歌を教えて下さいました。みんなで歌った小学校唱歌とは違った、ＮＨＫの〝みんなの歌〟風の歌ほ今でも鮮明に思い出されます。

勉強だけでは伝わって来ない人間的なものを、先生は歌を通して教えて下さったのでしょう。

大好きな先生でした。

とにかく、私の全ての生活が若葉の校歌に象徴されていました。

若葉には明るい朝日がとてもよく似合う気がします。

ポプラそして樹木園

戸　田　節　子　　（第八回・四十五年卒）

若菜校が今年で満二十歳をむかえられることを心からおよろこび申し上げます。

この二十年の間には、私達のたくさんの思い出が刻み込まれています。

私ほ第八回の卒業生ですが、たしか、児童会の歌に「若葉の緑につつまれて、すくすく伸びゆく私達・…・・」
というのがありました。

若葉校と言えばすぐに、浮んでくるのが〝ポプラ〃と〃樹木園〟ではないでしょうか。

あの頃も運動会のお弁当ほポプラの木陰で食べていました。

秋になると地面に落ちた枯れ葉を一生けんめいに集めざるの中に入れたことも楽しい思い出のひとつです。

また、県下の小学校にも数少ない樹木園は、理科の野外授業の場所であり、休み時間にはかくれんぼの絶好の場でもありました。

よく学び、よく遊んだ小学生時代でした。

私達の卒業の年に体育館が完成し、私達の手で床の雑巾がけなどを一生けんめいしました。まだ、真新しい木のにおいのする中で、一番のりで卒業式をすることができました。それまでは、校庭や、二つの教室の間の壁を取りほずして一つにした教室で行われていました。

私のわずか六年間のなかでも、いろいろなことがあったのですから、二十年間にはもっともっと、さまざまなできごとがあったはずです。

今年は校舎も新しく衣替えをします。

心機一転、これからもひとつひとつの歴史を積み重ねて、大きく成長していくことを願い、応援していきたいと思います。

先生のげんこつ

岩　見　康　夫　　（第十四回・五十一年卒）

自分の小学校時代を思い浮べてみて、まず最初に思い出すものは先生のげんこつです。ほんとうによくたたかれました。なぜたたかれたのか今はよく覚えていません。しかし、たたかれたからにはそれなりの悪さをしたのでしょう。あのたたかれた回数からみて、私はかなりの悪さをしていたことになります。

でも、今考えてみて当時の私は、それらの悪さに対してほとんど罪の意識がなかったようです。つまり、先生の前ではわかったような顔をして、実は先生のげんこつの其の意味をよく理解していなかったのです。

そして中学、高校へ進み、先生のげんこつの数ががぜん減りました。これは私の成長と共に善悪の区別がついてきたからにはかなりません。

これも小学校時代のげんこつが、私の頭のどこかに生きた道徳として植えつけられていたのだと思います。

そのおかげで、私も今ではりっぱな青年？！になりました。

体罰が問題になっている昨今ですが、子どもの人間形成のために〝愛のムチ〟をビシビシふるってほしいと思います。それが数年後、今の私のように懐かしく思い出され、必ず何かに役立つと思います。

黒柳さんに負けない私の学校

山　下　順　子　　（第十七回・五十四年卒）

先日「窓ぎわのトヅトちゃん」という本を読みました。これほ、黒柳徹子さんの自伝で、話は　〝トモエ学園〟でのできごとを中心に展開されます。

朝の光を浴びて木々が輝き、赤や黄色の花が咲きみだれるなか、楽しい授業ほ電車の教室で――と、トモエ学園ほ紹介してありますが、私はこの情景を思い浮べているうちに、ふと〝若葉〟　のことが思い出されてきました。電車の教室でこそなかったけれど、木造校舎を汽車ふきでめぐり、若葉自慢の緑の運動場を裸足でかけまわり、学級園には季節の花――。

トモエ学園には、小林校長先生という黒柳さんが深い感銘を受けた先生がおられましたが、我が若葉には、ユーモアの中に強い意志を秘め、私達の悩みだった汚いトイレを、すぱっと水洗にしてくださった水上千歳先生がおられました。

黒柳さんのトモエ学園の思い出に負けないくらい、私にはすばらしい若葉の思い出があります。

今年、若葉小は創立二十周年を迎えるわけですが、この長い時を経て〝若葉〟　の二文字に込められたすばらしい心と歴史を私達は大切に守り、また、これから芽ばえる〝若葉っ子〟に、それにもっと大きな枝と青々とした葉をつけ、育てていってほしいと思います。

△△△△ 会員のページ▽▽▽▽

ああ、雑感

興　梠　かずこ　　（三年・母）

若葉小学校が成人式を迎え、また新校舎に変身されることを、うれしく思います。子どもが通っている学校は、愛情が一年一年しみ込んでいくもので、うれしさもひとしおです。

二十年と聞けば、我が身の二十歳の頃を思い出し、もうあれから……と、両手だけでは

足りない、としつきにいろんなことを思い出します。なつかしく、楽しく思い出されるのほ、やはり小学校時代ではないでしょうか。
「外に出てドッチボールしょう」と言うと十人ばかりのわん白坊主達が（あの頃はこの背丈でも、大きい方だったので先頭に立ってもおかしくなかったのです）ドッと外に出ていくさまは、なつかしいですね。ドッチボールが盛んで、クラスマッチではよく優勝しました。
　だからかな、腕が太くなったのは！　今もクラス会をしています。大いに遊び叱られたなつかしい仲間は、今は中年になり、あの頃の思い出を胸いっぱいに敵と戦っているのです。だから子ども達よ、たーくさん遊んで、夢と希望をいっぱいもって、生きることに対する逞しいエネルギーを養ってほしいと思います。

若葉小学校創立二十周年に思う

時　吉　幸　男　（三年・父）

〃若葉〃私はこの名称が好きである。希望と安らぎが連想されるからである。天真爛漫な子ども達の校名として、実にふさわしいと思う。
　本校を巣立った子ども達は、もう二～三千名には達したであろう。現実の社会は、少なくとも安楽なものではない。時には、波乱万丈の世の柵がうっとおしい。こんなとき、遠き良き日々が懐かしく思い浮ぶ。それは、当時が最も純心多感であったことの証なのかも知れないが、それらの追憶はやがて勇往邁進する力を蘇らしてくれる。
　遠き良き日々、それは幼少年、特に小学校時代であると答えるのは私のみであろうか。小学時代の出来事、それは多くの人々にとって、恐らく永久に忘れることのない「若葉のメロディー」ではなかろうか。
　美しい自然に恵まれたこの若菜小が、在校生及び卒業生一人ひとりの心に、良き懐かしき母校として反映し続けるであろうことを信じて疑わない。

父親の変化

二子石　三吉男　　（四年・父）

子どもが生まれたとき
　名前を考えるのに　本を五冊も買いました。
子どもの目があいたとき
　つぶらな瞳に勝手な想像をし
子どもが笑ったとき
　　天使のように思い
子どもがしゃべったとき
　　うぐいすよりすばらしく
子どもが歩いたとき
　ペンギンよりスマートでした。
子どもが小学校に入学したとき

記念写真をとりまくり
子どもの遠足のとき
親の方が眠れなくて
子どもの運動会のとき
カモシカの足を期待しました。
そして数年
子どもの三十点のテストを見たとき
親の力はぬけてしまい
初めて子どもをなぐった夜
泣き寝入りしたその顔は
忘れていた自分の子どもの頃に瓜二つ。

人の子、犬の子

上村　勝（四年・父）

私は犬が好きである。今年が戌年だから犬の機嫌を取って言うわけでほない。現在二匹の犬を飼っている。一応、二匹共に血統書なるものがついてはいる。ポインター、牡、八歳。母犬は競技会で数回優勝した英国系チャンピオン犬、父犬は普通のポインタう。

もう一匹はこれも母犬は由緒正しき血統を持ったピーグルの牡、四歳。父犬は普通の.ヒーグル。どちらも母方の血統は優秀であるがこれは別にこちらで選んだわけではなく、偶然にそうなっただけである。二匹共、仔犬の時から苦労して育ててきた。特にポインターは共に山野を駆けめぐり一応一人前に育て上げたつもりである。それまでこの種の犬を飼ったこともなく、従って予備知識誠もなかったからその子育ては並大抵の苦労でほなかった。

車の乗り降りから始まり、山野での走行中、号令一つで方向転換ができる様にするまでは何度この犬は駄目犬だ、このまま捨てて帰ろうかと思ったことか、それでも繰り返した訓練は三年目位からどうやら身についてきた。

「右へ」と言っても左へ走り、「待て」と言っても知らぬ顔して走り去り、呼べど叫べど深い山の中から姿を見せず、あきらめて車を置いている場所まで一人トボトボと帰ると犬はすでに車の下で眠りこけているといった有様、そんな時つい腹立しさに蹴飛ばしでもすると犬は何のことやらわけがわからず再び山中へ一目散、そしてまた帰ってくるまで小一時間待たされるといったまったく他人が見ると馬鹿な主人と馬鹿な犬の喜劇としか映らないであろうことを繰り返してきた。

しかし今考えてみると犬は決して馬鹿ではなかった。

やっと車のある場所を探し当てて主人を待っていたのにいきなり蹴飛ばされたのでは仰天するのが当り前､よくよく考えると飼い主側の一方的判断による誤解であった様に思う。しかし明らかにわがままをすることもある。食事の催促、腹立ちまざれの遠吠え等、これ等については飼われている分際をわきまえぬわがままと判断して厳しくいましめる。人間も苦労しているのに犬だけ甘やかす理由はどこにもない。お互いさまではないか、常にこの気持ちが私にはある。

そして子どもについても同じことだと時々考えるのである。人間の子どもと犬の仔を一緒にするとは何事かと言われるかも知れないが、責任を持って育て一人前にすることに変わりない。そして子どもについても親の一方的誤解、予断と偏見を慎しみ、溺愛を憎み、本気で怒り、本気で愛し、子どもに対して責任を持つことを公言してはばからず、だからお前もしっかりせよと子どもに要求するつもりである。

言い方は適当ではないかも知れないが、妻にも常々子どもも仔犬も同じだ、気を許すな、一度教えたからと言って絶対忘れないということは言い切れないと言っている。

まして我家は妻も私も血統書などという立派なものはないただの人であればなおのことである。

時にあたりて二重の喜び

小　崎　あい子　　（六年・母）

若葉小学校創立二十周年記念の意義ある年と卒業とが重なるという事はなんと幸福なことだろう。

希望と不安に胸はずませてくぐった正門、あの目から六年、数々の思い出を重ねて今卒業の日を目前にして感慨無量のこの頃です。

代々に亘る諸先生方々の御尽力並びに地域の方々の御協力により素晴しく発展したことは喜びにたえません。

私達の誇りは、四季折りおりに奏でる自然のメロディー、数々の樹木の緑に囲まれ、萌える芝生めジュータンに飛び交うボールを追う子ども達、泥まみれになって裸足で元気一杯走り廻るあの子この子、若葉小学校ならではの風景です。

あっという間に卒業の日を迎える喜びは、生涯忘れ得ぬ一つの節として、若葉小学校で育まれた人々の心の奥底から永久に消えないことでしょう。

子どもは卒業致しましても、若葉小ＰＴＡのＯＢとして微力ではありますが協力を惜しまぬつもりです。

若葉小学校のますますの発展を心よりお祈り致しますと共に、二十周年記念にめぐりあえた二重の喜びを心より感謝いたします。

あ　と　が　き

「創立以来二十年という若葉校の歳月にふさわしい記念誌を作ろう己を合い言葉にして編集をすすめて采ました。首周年を越える学校がすでに数多く存在する現在、二十年の歴史は底の浅いものといえるかもしれません。しかし、創立以来の線化・勤労の心は脈々として受け継がれ、今や新しい伝統として定着しようとしていますし、自主的なＰＴＡ活動の充実ぶりほ識者の注目を集めています。

このような現状とこれまでの経過をつぶさに記録に止め、将来の発展のため寄与できたらというのが轟集委員一同の願いだったわけです。

けれども、この記念誌がそういう願いを十分にかなえてくれるという自信はありません。恐らく、皆さんの御期待に添えなかった点もあるかと思いますが、家業の合い間を見ては何度も何度も深夜に及ぶ作業をした委員の熱意に免じて、どうかお許しいただきたいと思

います。

今後、若葉小学校が三十年、五十年、百年を経た時、今の姿を継承し、さらに大きく発展することに熱い期待を寄せていますが、その過程において、この記念誌もまた、いっそうの充実をみることであろうと思います。

成人を迎えた日の若葉校の夢が、一つ一つ結実しますよう、皆様の御指導、御協力をさらにお願いしてあとがきといたします。

昭和五十七年三月

編集委員一同